

506

72

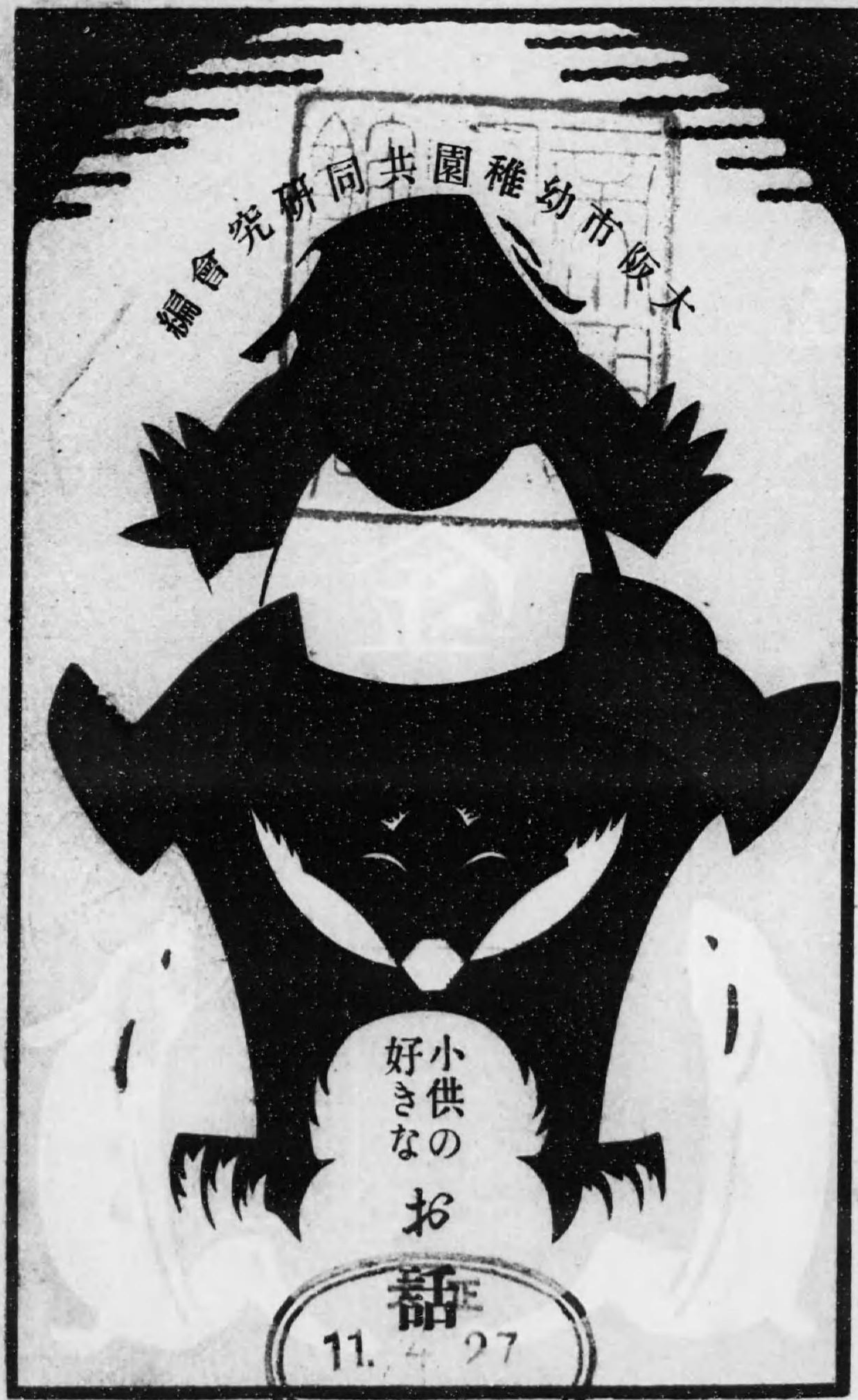


始



2024

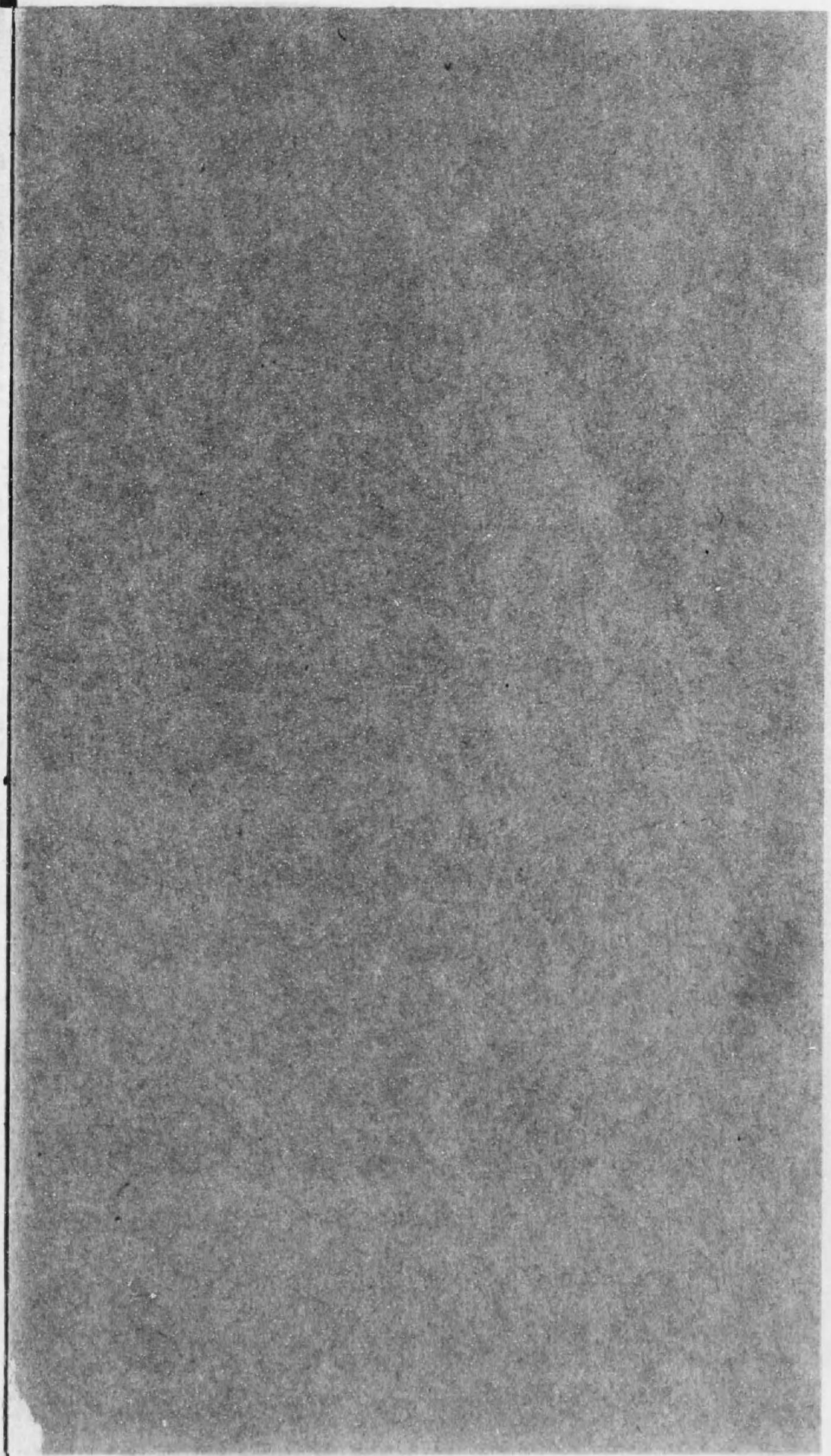
506-72



大阪市幼稚園共同研究会

小供の
好きな
お

話
11. 27
内交



はしがき

一、此お話は、吾が大阪市公立幼稚園共同研究会の事業として、市内各幼稚園に於て実際に幼児を取扱へる保母達が、日常幼児に話して聴かせ。實地に試みた幾多の御話の中で、最も幼児の歓迎を受けたものを採出して、御互に提供し之を蒐集して、各園幼児保育の實際資料としたいといふ趣旨で編纂したものでありますから、實に幼児に聴かせる御話の粹を蒐めたものであると謂うても、敢て誇言でないと思はれます。

(1)

二、此お話の資料を編纂する際、お話毎に其季節やら適當なる年齢、男女の性別又は所要の時間など研究調査してありましたが、餘りに窮窟な感じがありますので、其活用の方法は、實際保育の任に當らるゝ實務者の手腕に俟つの至當なるを認め、其記載を省略して、其代りに咄嗟の場合、此資料中より或る目的を以て、選擇搜索の便利を圖る爲に、話題の下に其内容の梗概即ちお話を聴く児童をして、知らず識ら

ずの裡に感得せしめる或る教訓的意味を知り得られる様に、簡單なる徳目のやうなものを記述して置くことにしました。此資料活用上幾分にも便利を感せられますれば、實に望外の本懐とする所でありませす。

三、此お話の資料は、保姆達が自ら創作したもの、他より聞いたもの又は色々の書冊を繕いて、採つた材料などを實驗上改作せられたものであつて、其言葉遣なども成るべく幼児の了解し得られる極めて平易な言葉其儘に書き綴つてありますから、曾に直接幼児保育に従事せられる保姆達の好資料であるばかりでなく、幼児を持たれる庭家の母御達が、日常愛兒の爲に話して聴かせたり、讀んで聞かせたりするの至極便利な参考資料として、最も重寶なものであると思ひます。

四、世の母御達較もすれば、愛兒が無作法又は不始末があつたり、粗暴輕舉又は臆病怠慢などの忌まはしき行爲のあつた時、直に正面より攻撃批難又は訓誨を以て、之を矯正しやうと試みられることを往々見受けませすが、これは却つて馬の耳に念佛の喩で、寧ろ有害無效の場合が多く、大抵は徒勞に歸します。かゝる時こそ此お話の

資料より、適當なる寓話を採擇して、適當なる時機に何氣なく話し聴かせて、徐ろに遷善改過の法を講ずる様應用せられませすれば、蓋し此資料の價值莫大なるものがあらうと思はれます。

五、此お話の資料を兒童に讀み聴かせる際、相手の兒童は未だお話を聴くことに馴れず、其要領を會得する能力の乏しい鈍い時代であるが上に、面白味を感じませねば聴くことを厭ふ様になりませすから、大人の心持の儘、速口で達者に讀み聞かせては何の効もありませせん、通常のお話よりも猶緩々と音聲の大小強弱やら抑揚頓挫やら、言葉の遲速やらに能く注意して、兒童が眞に適當に理解するや否や、本眞劍に興味を以て聴聞して居るか否かを顧慮しながら、讀み聴かせる様にして下さつたら、直様此資料を活用することが出來て、至極御便利であると思ひます。

六、此お話の資料は最初は其目的が、唯蒐集せられたものを羅列すれば、其任務を果し得たのでありますけれども、初めて幼児保育に従事せられる方々又は一般家庭の母御達の爲に之を公にしやうと云ふことになりましたので、之を活用せられる参考

までに、一通りお話の意義並に價値其取扱上の注意などを、附録として蛇足ながら
らも大要記述して置きましたから、先づそれを通讀せられて、一層有効に此資料を
運用して下さることになれば、編者の大に満足する所でありませす。

大正十年孟夏

編者識

子供の
好きな
お話

目次

話題	内容	頁
一、山の祭	(清潔)	一
二、花子さんと水	(衛生)	五
三、金の斧	(正直)	一一
四、栗の話	(忍耐)	一六
五、豆の兵隊さん	(忍耐)	二一
六、牛若丸	(立志)	三一
七、西瓜の家	(熱心)	三五
八、ポストの迷子	(守分)	四五

九、ちからん坊……………(自慢)……………四七

二〇、五色の帽……………(惡癖)……………五七

二一、蟻……………(盜心)……………六三

二二、蟹の横這ひ……………(盜心)……………六六

二三、お柏ねすみ……………(盜心)……………七一

二四、兄さん……………(制慾)……………七四

二五、狐の袋……………(油斷)……………七八

二六、因幡の兎……………(虚言)……………八四

二七、狐の自慢……………(虚勢)……………八七

二八、蟹崎と龜崎……………(反省)……………九二

二九、風船と球……………(沈思)……………九六

三〇、影法師賣……………(深慮)……………一〇〇

三一、驢馬の數……………(愚昧)……………一〇四

三二、傘屋のをぢさん……………(知慧)……………一〇八

三三、七兵衛さんの釣鐘……………(頓智)……………一一三

三四、帽子屋さんとお猿……………(頓智)……………一二七

三五、走るもの同志……………(注意)……………一二〇

三六、良夫さんのお歌……………(孝行)……………一二四

三七、正雄さんと妙子さん……………(孝行)……………一三一

三八、羊の毛ころも……………(從順)……………一三八

三九、悪太郎の夢……………(報恩)……………一四四

四〇、兎の餌……………(服從)……………一四六

四一、太郎さんのお食事……………(行儀)……………一五〇

四二、誰の足……………(行儀)……………一五四

四三、太郎の誕生日……………(友誼)……………一五七

四四、牛と猿と鳩……………(友誼)……………一六一

次 目

壹、猿の裁判	………	(友誼)	一六二
貳、蛙と金魚	………	(友誼)	一六六
参、風鈴物語	………	(友愛)	一七一
四、飛行機蜻蛉	………	(憐愛)	一七三
五、露子さんと金魚	………	(博愛)	一八〇
六、雀の飛行機	………	(博愛)	一八二
七、雀	………	(博愛)	一九〇
八、ピョン太郎(その一)	………	(忍耐)	一九三
九、ピョン太郎(その二)	………	(勉強)	一九七
十、ピョン太郎(その三)	………	(博愛)	二〇三
十一、赤い小袋	………	(慈悲)	二〇八
十二、一夜の宿	………	(慈悲)	二一六
十三、太郎さんと罾屋	………	(親切)	二二〇

次 目

一、お猿の火けし	………	(同情)	二二三
二、寶の卵	………	(積善)	二二四
三、きつゝゝき鳥	………	(薄情)	二二九
四、日の丸の旗	………	(元氣)	二三三
五、泣き蟲の國	………	(勇氣)	二四〇
六、桃太郎	………	(勇氣)	二四五
七、春雄さんの飛行機	………	(勇氣)	二五一
八、猿と蟹	………	(善惡)	二五六
九、兎の腹太鼓	………	(樂天)	二六一
十、二つの壘	………	(因果)	二六七
十一、山羊と狼	………	(因果)	二七三
十二、赤帽子	………	(因果)	二八一
十三、私には楓	………	(自然)	二八八



目 次

六、蛙……………(自然)……………二九四
 三、天狗の太鼓……………(制慾)……………二九六

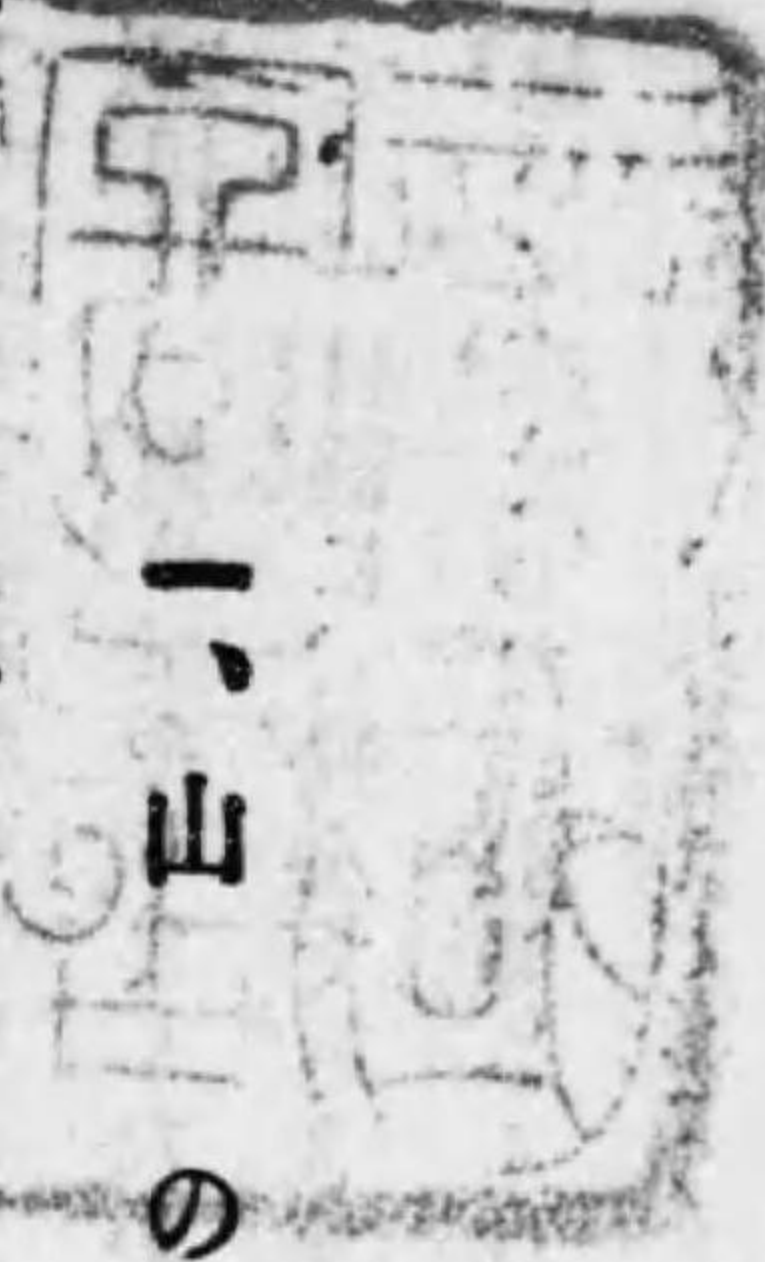
附 録

第壹 幼児を育てるのにお話の必要なること。
 第貳 幼児がお話を好む理由。
 第參 幼児の好むお話。
 第四 お話の種類と教育的價值。
 第五 教育的價值ある良いお話。
 第六 お話をする時の注意。

目 次 終

子供の好きなお話し

大阪市幼稚園共同研究会編



一、山の祭

太郎さんといふ子供がありました。

或日山の大將熊の王さんから、明日は山のお祭りをしますから、お出で下さらうと

お使いが来ました。太郎さんは、大喜びで、翌日は早くから仕度をして行きますと、

向ふから一匹の鹿が来ました。

「太郎さん太郎さん、どちらへお出でになりますか。」

「これから山のお祭りに行くのです。」

「私も一緒に、お連れ下さう。」

と、いつてお供をしました。

話しながら行きますと、道端に、一匹の兎が泣いてゐました、太郎さんは傍へよつて

「これこれ何を泣いてゐるのですか。」

兎は悲しうに、

「今朝は朝寝をしましたから、おそくなつてお祭りに行かれませんか。」

「イヤイヤおそくはない、お前は前足が短く、後足が長く、山に走り上ることは至つて上手であるから、早く走つて行つて、御門でお待ちなさい。」

と親切に、慰めてやりましたから、兎は元氣を出して、それではお先へ参りますといつて、一目散に、飛んで行きました、段々山へ登りかけますと、向ふから汚い猿が一匹泣いて来ました。太郎さんは傍へよつて、

「これ、お猿さんどうしたのか。」

猿は眞赤な顔をして、涙をふきながら、

「お祭りに行きましたけれども、もつときれいになつて来なければ、入れてあげら

れません。と言はれました。」

見ればこの猿は、洗ふことが嫌ひと見えて、手も足も泥だらけ、目には目やに、鼻には鼻汁、口には食べ物がひつついてゐて、いかにも汚い猿です、太郎さんは尤であると思つて、

「それでは、こゝで待つてゐて上げるから、綺麗に洗つて来なさい。」

猿は泣く泣く、傍の木に飛び付き、枝から枝へと傳うて、谷川に降り、手先と顔をチヨイチヨイと洗つて、直に登つて来ました、見ると顔の眞中と、手の眞中が少し白くなつただけです。太郎さんは、これを見て、

「モットモット、叮嚀に綺麗に洗はねばいかん。」

と、いひますと、猿は少し拗て動きません。太郎さんは親切に、

「私が洗つてあげるから、附いておいで。」

と、いつて谷の方へ下りてゆきますから、猿も仕方なしにふくれながら、ついて行きました。太郎さんは猿をつれて、きれいな水鏡にうつして見ますと、いかにも自分の

汚いのがわかりましたから、悪かつたと承知して、素直になり、太郎さんに教へて貰ふまゝに、身体も頭も顔も、よくよく擦つて洗ひ、手も足も指も爪も丁寧に洗ひました。鹿もお手傳ひしまして、きれいに拭いてやり、紙を出して鼻をかませました。さうして水鏡にうつして見ますと、まるで違ふお猿のやうに美しくなりました。皆々大喜びで山を登り、御門へ行きますと、きれいに掃除をして幕を張り、旗を出し、狐のをぢさんが、受附をしてゐます。兎も待つてゐます。一緒に門を這入つてゆくと、はや樂隊の音がドンチャンドンチャンと、きこえ、赤や青や白や黄色の色々な花が、美しく咲いて、真中の青々とした芝生の上に、熊の大將が座つて、周圍には小熊や、鹿や、猿や、兎も澤山ならんで居ます。向ふを見ると、海が見えて船が通り、下を見ると野も川も森も家も鉢山の様で、其中を汽車や電車が走つてゐます。太郎さんが、熊の大將の前へ行つて、「今日は有難う」と云ひますと、鹿猿兎も皆一緒に御禮をいひました。

これから、運動會をするといふことで、皆赤白の帽子をかぶつて、兩方へ居並び、熊

の大將は、テーブルの上に澤山褒美を積んで、其前に腰をかけ、太郎さんはお客さんの椅子にかけました。樂隊を合圖に双方から出まして、綱引、旗取、體操、遊戯、角力など代る代る始まりまして、皆がヤンヤと手を叩いて喜びました。

運動會がすんで、それ／＼褒美をいたゞき、隣の山へ行きますと、御馳走がならんであつて、皆々其處へ座つて、澤山御馳走をいたゞき、唱歌をしてゐますと、向ふから飛行機がとんで来て、お山の上を廻つて居ると思ふと、金や銀や白や赤のきれいな紙を澤山ちらして呉れましたから、皆大喜びで拾つて萬歳を唱へました。これでお山の祭は、おしまひで皆々喜んで、山を下りやうとしたら、向ふの山にお月様がニコ／＼と顔を出しかけて居られました。

二、花子さんご水

花子さんは、お隣の末子さんやお向ひの正雄さん達と、田圃へ遊びに行きました。

田圃には、赤や、黄や、白や、紫や、色々のお花が咲いてゐます。そして綺麗な綺麗な小川も流れてゐます。

花子さん達は大喜んで、元氣よく走り廻つて。

「末子さん爰に綺麗な綺麗なお花が澤山咲いてゐますよ。あら、蝶々が飛んで來ましたわ。」

正雄「やあ蜻蛉が飛んで來た、僕捕つてやらう。」

末子「あら蛙もめだかもたんと居ますよ、花子さんも、正雄さんもいらつしやいな。」

「さうほんとう」と、いつて走つて行きます。

こんなにして面白く遊びまはりました。

そのうち花子さんは汗が出て喉が乾いてまゐりました。

「あゝ水がほしい、どこかにないかしらん」と、ふり返りますと、小川の水がさらさらと流れて、底の小石までも、よく見えます。

「此の水きれいだなあ、一寸飲まう。」と思つて川の側にしやがんで、二つのお手で



すくうて、お口迄持つて行きかけますと、「花子さんく〜。」と、呼ぶ聲がします。ふり向きますと、花子さんの後には、やさしいやさしいお顔のおひげの白いお爺さんが、一つの壺を持つてニコ〜として立つていらつしやいます。

「花子さんあなた水がほしいのですか。」

と、やさしくおつしやいました。

「ハイ私喉がかはいてたまりませんの」と、いひますと、「そう、それではお爺さんの所へいらつしやい。砂糖水をあげませう。」

「お爺さんのところは何處ですの。」

「つい其處ですよ。」と、おつしやいます。

見ると直ぐ後に立派な御門のあるお家があります。

「有難う。」

「さあいらつしやい。」と、いつてお爺さんは持つてゐる壺の中へ、小川の水を汲んで、一緒にいらつしやいました。「さあお家へお上り。」と仰つしやつて、勝手元の方へ

行かれました。きつと砂糖水を取りにいらしたのでせう。

花子さんはお家へ上つて待つて居りますと、お爺さんがコップにきれいな水二杯と、さつきの壺とを、お盆に載せて持つていらつしやいました。そして其お盆には花子さんが今迄ちつとも見たことのない妙なおもちやの様なものが載せてあります。

「さあ花子さん、砂糖水をおあがり、何杯でもほしいだけあげますよ。けれどもお水を飲む前に、一寸花子さんに見せて上げるものがあります、面白いものですよ。」と、おつしやつて硝子の薄い板の上へ、壺の水を一滴おとして、又硝子の板を載せて玩具の様なものの筒の下へお入れになつて、

「さあ爰をかうして片一方の目をつむつてのぞいて御覽。」と、おつしやいました。花子さんは何かしらんと思つて、覗いて見ますと、何だか光つたものの中に、うぢやうぢや動いてゐるものが見えます。

「お爺さん何だか動いてゐますね。」

「それではもう一べん。」と、おつしやつて今度はコップの水を、硝子の板の上へち

よぼんと落して、其上へ硝子の板を載せて前のご入れ代へて、「さあ覗いて御覽。」と、おつしやいました。

前の通り覗きますと、今度も前と同じやうに光つたものの中に何だかちよいと動いてゐます。

「やつぱり何か動いてゐますよ。」

「それでは今度はこれを。」と、おつしやつて別のコップの水を、前の通り硝子の板の上に落して、硝子をあてて前のご取り代へて、「もう一遍覗いて御覽。」と、おつしやいましたので、また覗いて見ました。

ところが今度は光つたものばかりで、ちつとも動いてゐるものはありません。何時まで覗いて居ても動いてゐるものが出てきません。

「ちつとも動くものが出てきませんよ。」と、申しますと、

「さうですか夫れはね花子さん、初めのはこの壺の水とコップの水とでせう、壺の

は花子さんが飲まうとしてゐなかつた、小川の水です。このコップの水は水道の水、両方とも何か動いてゐるものがあつたでせう。それはね、花子さんが見てもお爺さんが見ても、誰が見てもこんなきれいな水です。

「けれどもこの水の中には御病氣になる細菌といふ虫が入つてゐるのですよ、これを飲んだら、きつとお腹の内で細菌が澤山になつてお腹を痛めたり、お熱を出したりするので。」

「お手水鉢の水でも、お池の水でも、井戸の水でも、總て沸かしてない水には、みんな細菌がゐるのです。」

「こちらの水は、なんぼみても動くものが出て来なかつたでせう。これは水道の水のわかしたものを、冷して置いたのです、それで細菌は死んでしまつて、一匹もゐないのです。花子さんはもう一寸で、細菌の澤山々居る川の水を飲む所でしたわね。こはかつたこと、まあよかつた、さあこの沸かした細菌のちつともゐない水をたんとお上りなさい。」

と、おつしやつて其水を下さいました。

花子さんもびつくりして、あゝ飲まなかつてよかつたこと、思つて其よい水を戴いて飲みました。そしてお爺さんに、

「ありがたう。」と、お禮を申しまして、お頭を上げますと、お爺さんも、お家もなくなつてゐました。

そして自分はやつぱり小川の傍にしやがんでゐました。

「あゝおかしいなあ。」と、不思議に思ひましたけれどももう花子さんは、小川の水を飲むのがこはくなつて、飲みたくも何ともない様になりました。

末子さんや、正雄さんは、やつぱり花を摘んだり、蝶や蜻蛉を追ひかけたりしてゐらつしやいますので、花子さんも一緒に遊んで、遅くならないうちにお宅へ歸りました。

或處に正直な樵夫が居ました。

深い山の奥の奥の古池の畔に茂つてゐる中の、太い樹を伐仆さうと思つて、一生懸命に働いて居るうち、餘り高く振り翳して「エエ」と計り打ち下しましたので、過つて其の斧は池の中へ落ちました。

ドブーン、と音がしたかと思つた時には、もう斧は沈んでゐたので、樵夫は力を落して、茫然立つた儘水の面を見て残念がつて居ますと、斧が落ちた所からメーツと神様が現はれて、

「何故、そんなに打萎れて居るのか。」

と、お尋ねになりましたから樵夫は、其譯を話しました。すると神様は池の中に這入つて行かれたかと思ふと、浮かんで來られる様子でしたが、忽ち水の底からピカピカと光がさして、山の奥の木立ちで立かこまれたはの暗い様な池が、赫々と輝くかと思ふと、神様は金の斧を持つて來られたのでした。

「此斧ではないか。」

樵夫は暫時其美しさに見惚れて、又急に世の中が輝く様に思はれて、瞠若に取られて居ました。纏て

「夫れでは御座いませぬ。」と正直に答へました。

神様は又水に沈んで、今度は銀の斧を持つて浮き上り、

「此の斧か。」とお尋ねになりました。

樵夫が何うして銀の斧等持つて居るものですか。けれども此所で「はい夫れで御座います。」と、さへ言へば、それが樵夫のものになるのかも知れませんが、此の樵夫はそんな美事な斧を見せられても、矢張り、

「それでは御座いませぬ。」と答へました。

神様は又々水に沈んで行かれました。

今度は樵夫が先程失くした斧を持つて浮き上り、

「それなら此の斧だらう。」と問はれますと、

樵夫は喜んで、

「はい。其斧で御座います。お蔭様で是から又仕事を續ける事が出来ます。こんな嬉しい事は御座いません。」

と、厚く御禮を言ひますと、神様は其正直な事を賞めて、其の斧に金銀の斧をも添へて與へ様となさいます。

樵夫は、

「それは二つとも私の中では御座いませぬから、戴けませぬ。」と辭退しますと、神様は、

「お前に返すのではない、是は二つとも上げるのだ、私から上げるのだ、私は此の山の池の神様である。」

と、言はれましたから、樵夫は恐るゝ押戴いて、家に歸りました。

家ではお父さんの歸りが、何時もより遅いので、どうしたのかと思つて、お母さんも子供も迎ひに行かうと、家の外に出て來た處が、お父さんは自分の古い鐵の斧の他に金の斧と銀の斧と、皆で三つ持つて、重相に一生懸命にかついで來ました。どうした

のかと思つて聞いた處が、お父さんは斯々して貰つたのだ。と、譯を話しました。皆聞いて喜びました。

翌る日の朝、樵夫は金の斧と銀の斧とを持つて、町へ行つて賣りましたら、澤山のお金になりました。それでお金持ちになりました。すると、近所の悪い樵夫が大層羨ましく思つて、

「自分も金銀の斧を授けて貰はう。」

と、直ぐに池の畔に走つて行き、斧を早速水の中へ投げ込んで、岸の岩に腰をかけて泣いて居ますと、神様が現れて、泣いて居る譯をお尋ねになりました。

慾張り男は空涙を流して、

「先刻斧を水の中へおとししました處どうしても取る事が出来ませんから、泣いて居るのです。」

と、答へましたので、神様は直ぐに水に沈んで、金の斧を持つて浮き上り、

「此の斧か。」と言はれるのも待たずに。

男は、あはて、斧に飛び付いて、

「エエ、これです〜。」

と、引き取らうとする處を、神様は大層不正直を怒つて、それをもぎ離して、投げ込んだ斧をも拾つてやらすに、其儘姿を消してしまはれました。

四、栗の 話

太郎さんといふ可愛らしい子供がありました。其の太郎さんのお祖父様のお家は、生駒山の麓で、後には木が澤山茂つて居るので、太郎さんはお祖父様のお家へ行く度に其お山に登つて、遊んでゐました。

だん／＼暑くなつて参りましたが、或時太郎さんは竿を持つて、蟬さしに参りましたら、大きな栗の木に澤山の蟬が鳴いて居りました。蟬を捕らうとよく見ますと、其栗の木には白い房の様になつた花が、一杯咲いて居りましたので、太郎さんはもう、蟬

をさす事は忘れてしまひまして、其竿で花を叩き折らうとしました時、白い花が高い所から、可愛らしい聲で、

「太郎さん、あなたね、どうぞ私を折らないで下さい。今あなたに折られると、私はほんとうに困りますからね、其變りもしあなたが開いて下さつたら、涼しくなつてから旨い旨い實になつて、あなたの所へ参りますよ。」

と申しました。太郎さんはお利口な子供ですから、直ぐ其花の言つた事を聞きまして温順しく其日は歸りました。さうすると段々涼しくなつて参りました。

或日のこと太郎さんは又お祖父様のお家へ行きました。

ふと先日花のいつた事を思ひ出して、もう屹度栗の實が出来てゐる頃だらうと思つて後の山へ登らうとしましたが、一人でうまい實を拾ふのは惜しいと思ひましたものですから、お隣の仲好の次郎さんを誘うて大きな籠と竿を持ちまして、一緒に登りました。

其の木の下に参りますと、此の間の花は散つてしまつて、とげの一ぱい生えた栗の實

が澤山なつて居ました。

太郎さんも、次郎さんも、もう取りたくて仕方がないので、いきなり其竿で叩き落さうとしました時、栗の實が申しますには、

「太郎さんも、次郎さんも、そんな亂暴な事はお止しなさい。今あなた方が取つたつて、此のとげで怪我をなさるばかりですよ。」

といひました。太郎さんは不思議に思ひまして、太郎は

「でもお前が花の時、今に涼しくなつたら、旨しい實を呉れると言つたじやないかそれに又お前はどうして、そんなとげをくつつけたのか、旨しい實はどこにあるのか。」

と申しましたら、栗は、

「其の旨しい實はね、此のとげの中にあります。」

此のとげはあなた方の召していらつしやる着物と同じで、これが無いと、中の實が大きくならないのです。今はね、其實がまだ小さくていけないのですから、此次の

日曜日まで、お待ちなさい。其時はあなた方が竿で叩かなくとも、私がわれて中から旨しい、實を出して上げますよ。」

と申しましたから、二人は又温順しく聽いて、今度は歸りがけに、道に咲いてゐる薄や、桔梗や、野菊や、萩等の綺麗な可愛らしい花を取つて、お家の皆さんに上げやうと思つて、喜んで持つて歸りました。

さあ、此の二人は日曜が待ち遠くて堪りません。やうく其の日が來ましたので、朝早く起きて、お祖父さんのお家に行きまして、次郎さんと一緒に、今度は二人共唯籠だけを持つて、走つてお山に登り、栗の木の下に參りましたら、先にお約束したやうに、とげが少し割れて居て其處から旨しそな實が、顔を出して、可愛らしい聲で、

「太郎さんも、次郎さんもお早う、さあ、籠を持つて此處にいらつしやい、其籠の中へ落ちますよ。」

と言ひましたから、太郎さんは急いで籠を持つて參りましたら、「一二三！」と掛聲をして其中に落ちました。

「さあ。今度は次郎さんですよ。」

と言つて、外の實が其籠の中に落ちました。

あちらからもこちらからも、太郎さん、次郎さんと落ちて来る。二人は喜んで彼方此方に走つて行つて拾つてゐるうちに、籠に一杯になりましたから、次郎さんが、

「栗さん栗さんもう私共はね、お籠に一ぱいになつたから、落ちないで下さい。」と申しましたから、栗は、

「そうですか、では又此の次の日曜日いらつしやい、今日の様に落して上げませう、ぢや左様なら。」

と申しました。

二人は大喜びで重いお籠を、提げて、早くお家へ歸へつて、皆さんに上げませうといふので、二人はお唱歌を謡ひながら、お祖父さんの所へ歸りました。そして、お祖父様にお話しいたしましたところが、

「太郎さんお前はよく辛抱して居りましたね。」と大層讀めて下さいました。

又大阪へ歸へつて、お父様やお母様にお話ししました處が、又太郎さんが從順に、栗のいふ事を聞きましたのを、賞めて下さいました。

太郎さんは近所のお友達にも其お話をしして、栗を分けて上げました。

五、豆の兵隊さん

今年六つになつた太郎さんが、お母様の御用でおば様のお家へお使ひに参りました。

おば様はニコ／＼しながら、太郎さんから御用を聞いて、

「太郎さんは此頃はお使が上手に出来るやうになつたから、御褒美にお豆を上げませうね。」

と、言つて大きな風呂敷に一ぱい豆を入れて下さいました。

處が其風呂敷には小さい穴が明いて居りましたが、おばさんも、太郎さんも、ちつとも氣が付きませんでした。

太郎さんは嬉しそうに豆の風呂敷を持って、

「おばさんありがたう、さやうなら。」

と、元氣よくおばさんのお家を出ました。

すると其歸り道でさつきの小さい穴から豆が一つポロツと落ちましたけれど、太郎さんはちつとも知らないでサツサと歩いて、とうとうお家へ歸つてしまひました。

「おかあ様、只今。」

と、重かつた風呂敷包を、ドシーンと下して、

「今日ね、おば様から澤山お豆を貰つて來ましたから甘しく煮て頂戴。」

と、お願ひしました。

お母様は直ぐに甘しい〜豆にして下さいましたから、太郎さんは大喜ひで食べました。

ところがさつき風呂敷から落ちた豆は土の上にはふり出されたので、

「私一人こんなところに落されて淋しいな、太郎さん太郎さん拾つて頂戴〜。」

と、ありつたけの聲を出して呼びましたが、太郎さんには聞えないと見えて、さつさと歸へつてしまひました。豆は一人で淋しいので、

「誰か来て頂戴、誰か来て頂戴。」

と、大きな聲で呼びましたが、誰も来て呉れません。

餘り泣きましたから、とうとう土の中へ這入つてしまひました。

暫くすると頭の上でザーザービュウ〜と、それはそれはひどい音がしましたから、

豆はこはくて〜小さくなつて居りましたが、やがて其の音も止みましたので、

「ああ好かつた事。」

と、一人言を云つて居りますと、急に豆の體が暑くなつて來てもう土の中に居られなくなりました。

そこで一寸のびをしましたところ、今迄はまつくらで何も見えなかつたのに、頭の上には青い美しい天井が出來てゐて、お日様は高い所でニコニコと笑つてゐらつしやいます。

「あ、嬉しいこと、もう少しのびをさせよう。」

と、ヌット立ちますと、前よりはよく方々が見えましたから豆は思はず、

「萬歳くくくく。」

と、嬉しがりて居ます。

そのところへ昨日の太郎さんが、鞆を提げて幼稚園へ行かうと思つて通りました。ところが昨日まで見た事のない物が生えて居ますから、

「何かしら、取つて行つて先生に見せよう。」

と、言つて取りかけました。其時何處かで、

「太郎さん、太郎さん。」

と、いふ聲が致します。

「誰かしら。」

と、方々を見ましたが、誰も居ません。また手を出して取らうとしました。

「太郎さんく私です取るのを待つて頂戴。」

と、また聲がするので其の方を見るとさつきの二葉の草です。不思議なので

「君は誰です?。」 「僕ですか、僕は豆です。」

と言つて、此間風呂敷から落された事を精しく話して、

「今取られると君とお遊びが出来ませんから暫らく待つて頂戴。」

とよくよく頼みましたから、太郎さんは豆の云ふことをきいて幼稚園へ行きました。

其翌日そこを通りますと、昨日の豆が大きくなつて葉が澤山ついて居ます。

太郎さんは葉が欲しいので手を出しました。

「太郎さんく待つて頂戴、今取られると太郎さんとお遊びが出来なくなります。」

と、いふ聲を聞いて豆の事を思ひ出して、

「あ、よしよし。」

と、言つて其のまゝ幼稚園へまゐりました。

次に太郎さんが通つた時には、美しい花が一ぱい咲いて居ますから、一つだけ花を取らうとしました。

すると又昨日のやうな可愛らしいお聲で、

「太郎さんく取るのを待つて頂戴、今花を取られると君とお遊びが出来なくなります。」

と、云ひましたので、止めてサツサと歩いて行きました。

また翌日通つた時には、愛らしい豆が澤山ぶらさがつて居ましたが、取ると遊べない事を思ひ出して、

「豆さん豆さん何時になればお遊びが出来ますか。」

と、尋ねました。すると豆は、

「今日太郎さんが幼稚園から帰りなすつたら遊びませう。」

と、言ひますので、太郎さんはそれをきいて元氣よく幼稚園へ行きました。

幼稚園でいろいろなお遊びをして歸つて来た太郎さんは、嬉しいので、帽子、カバンお辨當を、きちんと片付けて、

「お母さん今日は豆さんの處へ遊びに行つてまゐります。」

と、言つてお家を出ました。此間から待つて居た豆の下へ行つて

「豆さん豆さんお遊びませう。」

と、大きい聲で呼びました。

「一寸待つて頂戴、今そこへ出ますよ。」

と、いふ聲がすると、豆の鞆が、バーンと割れて中から豆がポロポロと落ちました。

「お、豆さん。」

と、太郎さんは喜んで側へ行つてよく見ますと、それは豆でなくて頭には帽子を被り腰にはサーベルを提げ、小さい靴を履いて胸にピカピカ光つた勳章附けた、可愛らしい兵隊さんです。

太郎さんは喫驚してちつと見て居ますと、一人の兵隊さんが、

「僕は豆の兵隊です、まだく澤山居ますよ。」

と、言つて居る間に次の鞆が割れて、ポロポロと豆が出ました。

皆小さい豆の兵隊さんです、さうして次へく鞆が割れて、太郎さんの前へ澤山の

兵隊さんが行儀よく並びました。其内に一人の兵隊さんが、

「太郎さん、大將になつて頂戴。」

と、頼みますから太郎は直ぐにお家へ歸つて、帽子とサーベルとラツバを持つて來ました。太郎さんの、

「氣を付け。」

の、聲で皆は綺麗に並びました。

「右へならへ。」「なほれ。」「前へ進め。」

大きい兵隊さんと少しも變りません。

太郎さんはラツバをくちにあて、

「チテチテタ、トタラツタタタ ター

チテチテタ、トタラツタタタ ター。」

と、吹きますと皆は足をよく揃へてさうく近所のお山迄參りました。

「全隊止め。」「右むけ右。」「休め。」

の、號令で兵隊さん達は肩から鐵砲を下して休みました。暫らくしますと、

「戦争をやませう。」

と、一人の兵隊さんが申しましたので、赤白の二組に分れて初めました。

ボン／＼と鐵砲を打つ音や進め／＼の聲などそれはそれは面白い戦争でした。

其中に太郎さんが休戦ラツバを吹きましたので、皆が止めて、此度は土の上へコロコロと寝ました。

兵隊さんが皆寝てしまつてから、太郎さんは急いでお家へ行きました。

「お母さま兵隊さんに何かお菓子を上上げて頂戴。」

と、お頼みしますと、

「どんなお菓子がよくしいの？」

とお尋ねになりましたから、

「小さい兵隊さんですから、小さいビスケットを下さう。」

と、言つて袋一ぱいお母さんから貰つて又急いで元の道へ歸つて來ますと、兵隊さんはさつきのまゝでよく寝て居ましたから、起床のラツバを吹いて皆を起して、

「褒美に是をあげませう。」

と、二つづつ上げました。

「嬉しいな。」「甘しいな。」

と、兵隊さんは大喜びで食べました。さうして居る間にだんく夕方になつて來ましたので、又元の様に綺麗に並んでラツバに合せて豆のお家まで來ました。すると一人の兵隊さんが、

「太郎さん、さやうなら、また明日遊びませうね、失敬。」

と、それはく元氣よいお聲で元の鞘へ三人で這入りました。太郎さんは皆が鞘の中へ入るまで見送つて、

「豆の兵隊さん、さやうなら。」

と大きな聲でいつてお家へ歸りました。

六、牛 若 丸

昔々、源氏の大将に、義經といふ人がありました。

其方は小さい時の御名を、牛若丸といひました、牛若丸は未だ嬰兒ちやんの時分に、お父さんが平家の清盛といふ人と、戦争をして、敗けて死んでしまひなされたものですから、京都のすつと奥の方の、鞍馬山といふ山にあるお寺に、預けられて居なされたのです。

牛若丸は、中々元氣な、強い負けることの嫌ひな兒でしたから、何でも大きくなつたらば、豪い大将になつて、平家を退治しやうと思つて、晩になると、獨りで裏の淋しい、僧正が谷といふ處へいつては、劍術の稽古をして居ました。

ところが、或晩いつもの通りに、牛若丸は「エー、ヤツ」といつて、劍術の稽古をして居ると、其處へ、眞白の着物を着た、顔の赤い、鼻の高い、天狗さんがバツと出て來

「牛若丸、お前は、中々感心な兒だ、私はお前のやうな、強い兒に、劍術を教へてやらうと思つて居たところだから、是からは、私が先生になつてやらう、又そんな高い處へでも、ビヨイビヨイト、飛ぶことも出来るやうにしてあげよう。」といひました。牛若丸は大層よろこんで、

「どうぞお願いいたします」

と、いうてそれから、もつともつと一生懸命になつて、どんな雨の降る晩でも、寒い晩でも少しも休まずに、よく辛抱して勉強したものですから、ずんずん上手になつて、しまひには、高い下駄を履いたまゝでも、高い木の上などへ、ビヨイビヨイト飛ぶやうな事までも、出来るやうになりました。

此時分に、京都の叡山といふ山の西塔といふ處に、武藏坊辨慶といふ力の強い坊さんがありました。

この坊さんは、人が多勢かゝらなければ、動かない様な釣鐘でも、獨りでヨイシヨと

かつぐ様な、えらい力もちでした。

此辨慶はどうぞして、自分よりも豪い人の、御家來になりたいと思つて、やつぱり京都の五條の橋といふ、こんな太い欄干があつて、又こんな「ギボシ」のついてゐる橋の處へ行つては、隠れてゐて、通る人を、大きな長刀をもつて、切りつけます。さうして若し自分より強い人があつたら、自分は、其人の御家來になつて、働かうと思つてゐたのですけれど、辨慶の様な強い人には、誰も皆負けてしまひました。

是れを聞いて、牛若丸は、或るお月夜の晩に笛を吹きながら、お稚見さんの風をして五條の橋へ行きました。

五條の橋の處へ行くと、大きな辨慶は、大長刀を持つて、「ヤーツレ」といつて切りつけて來ました、ところが牛若丸は、ビヨイビヨイト、あちらへ飛んだり、こゝにゐるかと思ふと後へ、またこちらへと、あんまり早いので、強い辨慶も目がまひさうになつて來ました。

そのうちに牛若丸は、持つてゐる扇を、うまいことホイと投げたものですから、どう

どう辨慶は、長刀を、そこへがらりと落して、「ア、仕舞つた。」と思つて居る處を牛若丸がおさへつけてしまひました。

そこで辨慶は、牛若丸の前に手をついて、私はあなたのような豪い方の、御家來にならいたいと思つて居ましたのですから、どうぞ御家來にして下さいといふと、牛若丸も亦こんな強い家來がほしいと思つて居たところですから、そんなら家來にしてあげやう、といつて、家來にしてやりました。

さうしたら、牛若丸の強いのを聞いて、あちらからも、こちらからも、御家來にして下さいと云つて、來る者がだん／＼増えて來ましたから、いつまでも牛若丸といふ名では、あんまり子供のやうであるからといつて、源の義經といふお名になつて、それから諸處で軍をして、どう／＼平家を退治して、豪い大將になつたのです、又辨慶さんも軍のあるたびに、よく働きました。

七、西瓜の家

夏の一日空が美しく晴れて、涼しい風がそよ／＼と、吹いてゐました。

房子さんは、朝から自分の六疊の部屋に籠つて、一生懸命に、人形の着物を縫つてゐましたが、お晝頃になつて、大分勞れて來ました。

庭に出て草の上にも、横になつて見たいと思つてゐると、お母さんが、小さい西瓜を抱へながら、入つておいでになりました、房子さんは、「まあ、綺麗な西瓜。」と云つてお母様を見上げました、お母さまは其處へお座りになつて、

「房子さん、お盆を持つていらつしやう。」

ど、お云ひになりました。

房子さんは大好きの西瓜が喰べられるので、いそ／＼と、臺所に行つて、お盆を持つて來ました。

お母さんは、お盆の上に西瓜を載せて、

「これは祖母さんから戴いたのですよ。今日は朝からお裁縫に精が出たやうだから御褒美に、これを上げます、兄さんと二人でお喰べなさい。」

と、優しく云ひ残して、お母さんは房子さんの部屋を、出ていらつしやいました。あとに残つた房子さんは、大喜びで、暫らくの間は艶々した緑の皮をうつとりと、眺めてゐましたが、やがて机の抽斗から、小刀を取り出して、真中から二つに割らうとしました。

キラ／＼と光る小刀の刃が、緑の皮を裂いて、すふりと赤い肉に、斬り込みますと、何とも云へぬさつぱりした匂と一所に汁が、ぱつと飛んで、小刀の柄を濡しました。房子さんは覺えず、指を迂らして、小刀を取落しました。すると小刀は、西瓜の切口から、だん／＼と、中へ沈んで行きます。

びつくりして割目から覗いて見ると、西瓜の内部が長い隧道のやうになつて、その中を小刀が、キラリキラリと光つて落ちて行きます。

不思議でたまりませんので、切口から目を離して、西瓜の外側を眺めますと、外側に

は何の變りもありません。

小さい西瓜が、ちやんとお盆の上のつてゐるばかりです。變だなど思つて、も一度切口から覗き込みますと、小刀は矢張り、下へ下へと沈んで行きます。

もはや七八町許りもおちたであらうと思はれますが、それでも未だ、はつきりと見えません。

房子さんは恐しくなつて來ました。眼を瞑つて、頭を振つて、それから眼を開きますと、西瓜は靜かに、お盆の上に載つてゐました。

「どうしたんだらう、ほんとに變だな、兄さんと呼んで、お目にかけてやう。」

と、房子さんは獨言を云ひながら、西瓜に手をかけて、ちつと考へ込んでゐましたが「でも兄さんは屹度怒るにちがひない、あの小刀を下さつたとき、大事にしなさいとおつしやつたのに。」

「さゝわ、妻もう一度覗いて見るわ。」

と、云ひながら房子さんは、もう一度切口から西瓜の内部を覗き込みました。

すると最早小刀は見えず、長い〜繩の梯子が、ふらりと垂れてゐました。奥の方が暗いので、梯子の下の端が何處まで延びてゐるのか、それは薩張りわかりませぬ。

房子さんは呆れたやうな顔をして、

「まあ、どうしたんだらう。」「西瓜の中に梯子なんか垂れてゐる。」

「でも、いゝことがあるわ。」

「妾梯子を傳つて、下へ降りて、小刀を拾つて来よう。」

と、云ひました。

ほんとに房子さんは、小刀が惜しくて堪らないのでした、其小刀は、昨年の春、兄さんが競争の賞品に、學校からお貰ひになつたのを、房子さんが、兄さんに強請つて、譲り受けた大事の品で、柄にはわざ〜、房子と彫込んだのでありました。

そんな大事な小刀なので、どうでもして、取出さねばならぬと、思ひました。

で房子さんは、いよく覺悟を決めて、恐ろしいのを我慢して、そつと繩の梯子に片

脚を掛けますと、梯子は、ブラリブラリと氣味悪く揺れました。房子さんは、急に脚を引込めて、

「おゝ、恐いこと、ほんとに氣味の悪い梯子だわ。」

と、いひましたが、すぐに、氣を取り直して、もう一度そつと、梯子に脚をかけますと、矢張氣味悪くユラリユラリと、動きまゐります。それでもやつと我慢して、兩方の手で一生懸命に縋り付きながら、二足三足と、西瓜の中へ降りてゆきました。

何しろ隧道のやうな、長い長い穴を、降りてゆくのですから、氣味の悪いことは、一通りではありません。

暗くて冷たくて、西瓜の汁が、ぬる〜して、ほんとに泣き出したい位です。

その中やつと梯子がおしまひになつて、房子さんの脚が地面にとゞきました。

房子さんは、はつと深い息を吐いて、地面に座り込んだ儘眼をつぶつて、動悸の靜ま

るのを待つてゐました。暫くして、眼の前に廣い野原が見えてゐました。

何時の間にか、四邊が急に明るくなつて、眼の前に廣い野原が見えてゐました。

そして其處には、いろ／＼な花が、綺麗に咲き亂れてゐました。

房子さんは、今までの辛さも、忘れてしまつて、恍惚と見とれてゐましたが、ふと氣がついて、

「妾一人でこんな所まで來たのであるから、歸つたら兄さんに随分威張つてもいいわ。」

でも、兄さんが嘘だと思ひになるといけないうわ、だから證據に花を摘んで歸りませう。」

と、云ひ乍ら脚の下に咲いてゐた大きな桃色の花を折つて、頭髮にさしました。

さて何處に行つたら、小刀が見付かるだらうと、考へてゐますと、遙か向ふの方に、小さい家が一つ見えました。

房子さんは、

「あそこに行つて聞いて見よう。」

と獨言をいつて、其家の方に歩き出しました。

だん／＼家に近くなりましたが、家は少しも大きくなりません。變だなど思つて、歩いてゐる内に、とう／＼家のそばに來ました。

それでも少しも大きくなりません。

家は一尺四方位で、マツチ箱位の窓が、所々に明いてゐます。房子さんは足音を忍ばせて、そつと歩みよつて、窓から覗き込みました。

家の中にはお盆位の机を据えて、その周りに人形のやうな男が七八人腰を下して、針程の箸で御飯を食べてゐました。

「まあ驚いた。まるで人形のやうだわ。あれで御飯なんか食べるから可笑しいわ。」と、思つて、房子さんは息もつかずに、熱心に眺めてゐますと、ふと一人の男の前に

楊子位の小刀が置いてあるのに氣がつかしました。

それが形といひ、色合といひ、兄さんから貰つた秘藏の小刀にそつくりでした。

「變だわ、あれは妾の小刀にそつくりだわ、だけど、妾のはあんなに小さくはない

「等だわ。」

と、考へながら眼が痛くなる程見つめて居ると、どうやら其の小刀に房子と書いてあるやうです。

小さい男共は、房子さんが覗いてゐるとは知らないで、蚊の羽音のやうな、小さい聲で何やら話してゐます。

房子さんは、息をこらして耳をすましました。

「その綺麗な小刀はどうしたんだ。」

と、一人がいひました。すると他の男は小刀を取り上げて、さも自慢さうに、

「これかい、これはね、盗んで来たんだよ。」

「今日綺麗な娘さんが、これで西瓜を割つたんだね。」

「乃公はそれを見て、欲しくて堪らなかつたんだ、それでね、わざと、西瓜の汁を飛ばしてやつたんだ。すると娘さんが、うっかり小刀を取落したんだよ。其奴を拾つて来たといふ譯さ。」

と、云ひながら、得意さうに、友達の顔を見廻しました。

「甘くやつたもんだね。」

「ほんとに、綺麗な小刀だね。」

と、大きな聲を出しますと、小刀を盗んだ男は、はらくとして、

「おいしく、そんな大きな聲をしない、娘さんがやつて来たらどうする。」

房子さんは幽かにこの話を聞いて、覺えず、

「それぢや、あれは妻の小刀に相違ないわ。」

と、云ひました。

房子さんは小さい聲で言つた積りでしたが、人形のやうな小男共には、それが雷のやうに、大きくひびきました。

男共は吃驚して、

「それ娘さんが来た。」

「逃げる、逃げる。」

と、いふかと思ふと、むく／＼と一筋の烟が舞ひ上つて、家も机も、男共も見えなくなりました。

餘程あわてたと見えて、小刀は其まゝ地面に残つてゐました。

房子さんは大喜びで、それを拾ひ上げましたが、何しろ妻楊子位に小さくなつて了つてゐるので、袂から紙を出して、小刀を包んで、大切に懐にしまひました。

そして、元來た路に引返ししました。

花の野原を通り過ぎて、繩の梯子の處に来て、段々昇つて行く内に、あたりが次第に明るくなつて來ました。

そして何時の間にか、西瓜の中から出て了ひました。すると其處は自分の六疊の部屋で、西瓜はちやんと盆の上のつてゐます。

房子さんは不思議で不思議で堪りません、念の爲に懐から紙を取出して、開いて見ますと、小刀は何時の間にか元の通りの大きさになつてゐました。

今度は頭髪に手をやつて、さつき差しておいた花を探しましたが、どうしても見つかりません。

りません。

房子さんは、大きな溜息をついて、

「惜しいことをした、あれが失くなつたら、兄さんに話しても、屹度嘘だとおつしやるに違ひないわ。」

と、云つてゐますと、いきなり耳の傍で

「房ちゃん、房ちゃん。」

と云ふ聲が聞えました、吃驚して振り向くと、兄さんがにこ／＼笑つて、

「房ちゃん、どうしたんだ、早く西瓜をお切りよ。」

と、云ひました。

房子さんは、ほつと氣がついて、いそいで其の西瓜を切つて食べました。

八、ポストの迷子

或る淋しい町の角に立つてゐるポストが、退屈で退屈でたまりませんので散歩に出かけました。

道で電信柱に逢つたので、

「おい、おい、電信柱君。君は其處に立ちづめで、うん／＼うなつてゐるが苦しくは無いかい。」

「何初めのうちはちつと苦しかつたが、馴れると何でもないよ。ポスト君、君はさう勝手に歩くといはないだらう。」

「時間にさへ歸へりやい／＼だらう、僕はもつと歩いて見やう。」

ポストは町を見て歩くのが面白くて、ブラ／＼と遠くまで来ました。もう集配人の来る時間だから歸らうと思ふと、サア大變、初めて歩いたので歸り道が分かりません。

集配人は、何時ものポストの所迄来るとポストが無いので、喫驚して町中探し歩きましました。

「迷子の迷子のポストやあい。」



「迷子の迷子のポストやあい。」

するとひよつくりポストに出逢ひました。

「ヤア、何うした。ポストが歩き出しちや困るじやないか。」

「ちよつと歩いて見たくなつたのです、あまり退屈なのですもの。」

「君は歩かなくても歩いてゐるやうなものだ。君はじつとして居ても君の懐から日本國中は勿論世界中へ歩いて行くものがあるじやないか、迷子になつたりするよりぢつとしてゐて、懐にあるものを、世界中へ歩かせる方が何んなによいか知れないそれが君の役目だ、さあ歸つた、歸つた。」

其處で迷子のポストも親切な集配人に連れられて、もとのところへ歸りました。

九、ちからん坊

天王寺の南門につゝ立つておいでになる仁王様が、ボカ〜と、暖い或る日のこと。

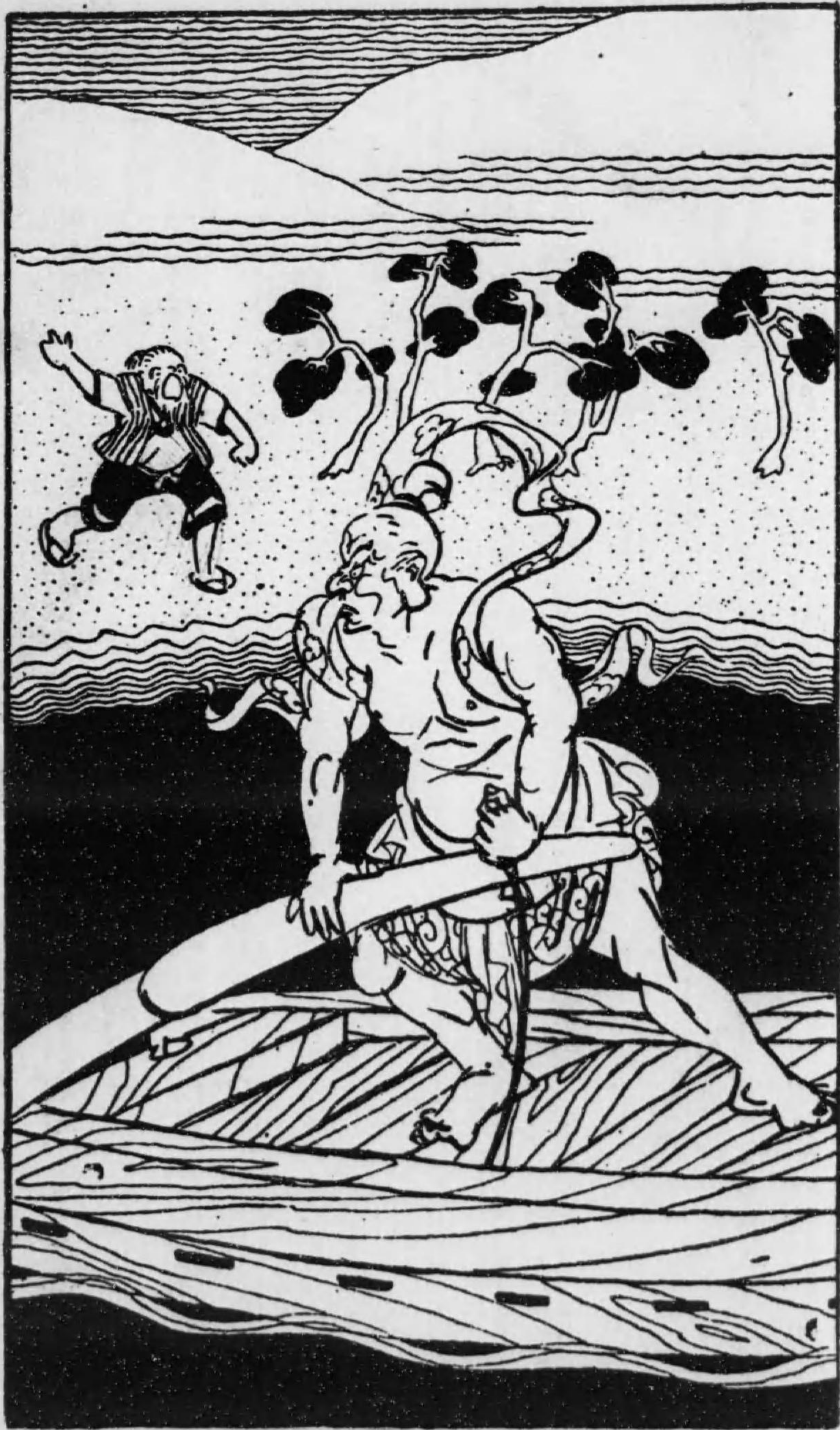
ウーンとうなりながら、大きな両方の手を高く舉げて、アアと如何にもつまらなさ
 さうに、あくびをなさいました。

丁度其の時、御門の傍に、一人のお爺さんが、日向ぼつこをしながら、好い氣持で、
 ウト／＼眠つて居ましたが、何だか頭の上の方で、妙な音がしますので、何者だらう
 と、ち／＼と見上げますと、仁王様が、あくびをなさるのでした、そこで、

「仁王様、仁王様、一たいどうなさいました。」
 と、聞きましたら、

「まあ、お爺さん、聞いておくれ、世の中の者等は、みんな弱蟲ばかりでな、この
 わたしに力競べしようなんか云ふ人が一人も無いのぢや、わたしもかうして、毎日
 こゝにつゝ立つたまゝぢつとして居ることにあき／＼したよ、アア。」
 と、又しても力自慢の仁王様は、大きなあくびをなさいます。

「ハー、左様でございましたか、なほ程。それぢや仁王様、いゝ事を教へて上げ
 ませう。あの九州と云ふ國へ行きますとね、ずつと、ずつと、山の奥の方に、ちか



らん坊と云つて、それは、それは、力強が居るさうでございます。まあ、一つ、其處へお出かけになつて、其のちからん坊とでも、力競べをしてご覧になつてはどうでございますか。」と申しました。

面白い事があるぞと思つて、お爺さんの話を、にこ／＼して聞いておいでになつた、仁王様は、大きな手をポンと、お打ちになつて、

「お爺さん、いゝ事を教へてくれたね、有りがたう、有りがたう。」と、いつもの怖い顔ではなくて、其の時ばかりは、につこりなさいました。

「世の中で、わたし程偉いものはありやしない、ちからん坊なんぞ小指の先でころばしてやるは。」

と、偉さうな事を、お考へになつた。

仁王様は、大阪中の人が誰も知らぬ夜の間に、ソーツと、天王寺の南門からぬけ出て、大手を振り乍ら、スタコラ、スタコラ、築港へとお出かけになりました。

丁度、よい事には一艘の舟がつかないでありましたので、ドシンと乗り込まれるが早い

か、一生懸命に漕ぎ初められました。毎日々々、廣い海の上を、西へ西へと、漕いで行かれる内に、とうとう、遠い、海に向ふの九州にお着きになりました。

何でも、ちからん坊のお家と云ふのは、ずーつと山の奥だと聞いてゐたからと、お思ひになつて、お舟を濱邊につないで置いて、野を横切つたり、岡を通つたりして、ずんづ、寂しい山の奥へ這入られました。

見ると向ふに、大きな蕨葺の家が見えます。

仁王様は、其の家を目がけて、とんと行かれますと、一人のお婆さんが、窓のところでお仕事をしてゐました。入日のところで、仁王様が大聲で、

「ごめん、ごめん、誰ぞおうちかね。」

と、呼ばれますと、ゴホンとせきをして、

「ハアイ。」と、答へ乍ら、お婆さんが出ました。

「ちからん坊のお家と云ふのは、もしや、こゝらではないかな。」と云はれますと、

「ハイ、ちからん坊の家は此處で御座います。でも、あなたは一たい。どなたでございませうの、そして何しにおいでになりました。」とお婆さんは、小むづかしい仁王様のお顔を、ぢつと見ました。

「わたしは、大阪の天王寺の南門にゐる、仁王様と、云ふ者ぢや、實はちからん坊さんと、腕くらべをしに來ました。ちからん坊さんは居なされるかね。」といひますと「お爺さんの、ちからん坊は、あやにく朝から出かけました。でも、まあ、ようこそお越しになりました。今に歸つて來ませうから、まあ、おかけなさいまし。」

と、云つてお座蒲團を出しました。

見れば、晩寝る時に、着る様な大蒲團です。

「お婆さん、これは一たい、何ですかい。」

と、聞かれますと、

「へエ、仁王様、これはうちの、ちからん坊の、座蒲團ですよ。」

と、お婆さんは、すましたものです。

「ハハア、なるほどな。」と、おつしやつたものゝ。仁王様は、少しびつくりなさつて、きよと〜あたりを見廻してゐられる内に、ふと、土間の隅に、立てかけてある大柱に気がつきました。

「お婆さん、大分大きい柱があるじやないか、あれは何ですかい。」

「へエ、仁王様、あれはうちの、ちからん坊の杖ですよ。」

仁王様はえらい事になつたと思つて、だん〜、ふる〜と震へる様におなりになりました。

そして、お勝手の棚を見れば、大きな、すり鉢はどのお茶碗がのつてゐます。

「お婆さん、あれは一たい何だね。」

「へエ、仁王様、あれはうちのちからん坊の、お茶呑茶碗ですよ。」

仁王様は、いよ〜と喫驚して、

「こりや、大變だ、こんな偉者と、腕つくらべをしたつて、とても適ひつこはない。」

と、思つて、そろ〜逃げ出す支度をしはじめられると、こは如何に、俄かに、ドン

ン〜と云ふ音がして立てかけてあつた、柱も、棚の上のお茶碗も、グサ〜と、揺れ出しました。

見れば、お婆さんも、フラン〜と揺られてゐます。

「どうやら、地震の様だな。」

と、思つて、グサリ〜とゆれてゐる、あたりのものを見廻してゐる内に、仁王様もどうやら、あぶなくなつて、ひよろ、ひよろ、しながら、

「お婆さん、やあ大變だよ、いよ〜こりや、地震だ。」

と、おつしやいますと、お婆さんは、クス〜笑つて、

「ところが、仁王様、あれは地震ぢやないんですよ。ちからん坊が、歸つて来た足音ですよ。」と、云ひました。

それを聞くど、いよ〜仁王様も、たまりかねて、さようなら、とも云はないで、いきなり、お家の外へ、かけてお出になるかと思ふと、もう後も見ずに、スタコラ、スタコラ、と一生懸命です。

「仁王さまーあ、仁王さまーあ、ちからん坊は、もうぢき歸るんですよーう、もう一寸、お待ち下さいよーう。」

と、そんなに、後から、呼びこめても、後も向かずに、

「急に、ご用が出来たんだよーう、わたしはもう、歸るんだよーう。」と、云ひ捨て、とんとく濱邊の方へと、とんでおいきになりました。

飛んでく、やつこの事で、海邊まで行きますと、後の方から雷さまの様な聲で、

「おーい、く、仁王さまーあ、一寸待つて下さい、折角、腕くらべをしに、おいでなされたのぢやありませんか、やつと、今山から歸つたところですよ、さあ、早く力くらべをさせう。」と、云つて、ちからん坊が、呼びかけました。

仁王様は、こはくながら、そつと、振り向いて見ると山の様な大男が、かけて來ます。

「こりや、かなはぬ。」

と、仁王様は、返事をするところの騒ぎぢやない。「一生懸命に走つて、つないでお

たお舟の中へ「ドシン」と、とびのるが早い、エツシ、エツシ、とこぎ出して、すんく沖へお出になりました。

「おーい、おーい、仁王さまーあ、一寸待つて下さい、

こちらへ漕いで、おかへりなさいよーう、腕くらべをさせう。」

と、雷様のやうな聲が、まだきこえます。

それでも聞えぬふりをして、グンく、グンく漕ぎつけました。

すると、ちからん坊は、懐から、長いくかねの鎖をゾロリ、と引ずり出して、ポイと沖のお舟を目がけて、なげかけました。鎖の先が、ヒラリ、と、とんで來たかと思ふと、ポットリ仁王様の、お舟の中に落ちて、其の先の鉤が、ギユツ、と、舟底にささりました。

「しめたぞつ。」

と、ちからん坊は、其のくさを引張つて、お舟を引寄せようと、しますので、

「引張られて、たまるものか。」

ど、お舟の方では、仁王様も、鎖を引張り初められました。ちからん坊が、「ウントコ
 しゃ」と一引きすれば、仁王様が「エンヤラサ」と一引きし、「ウントコサ」「エンヤラサ」
 と丁度、運動會の綱引きの様に、鎖の引張り合つてが始まりました。
 ちからん坊が、今度こそ一引きに、仁王様を引寄せてやらうと、有りつたけの力を込
 めて、「ウントコサ」と引張るので、仁王様も、ちからん坊なんかには、負けてたまるも
 のか、と力一ぱいで、「エンヤラサ」と引きましたので、とうとう丈夫な鎖は、中から
 ポツツリと切れて、大男の仁王様は鎖を握つたまゝ、お舟の中へ引くりかへつて、お
 しまひになりました。

濱邊では、山の様なちからん坊が、これも鎖を、つかまへたまゝ、はねかへりました
 「ヤレ〜、ちからん坊に、つかまらないでよかつた。世の中には、随分、強い者
 も居るもんぢやな。」

ど、一人ごとを云ひながら、ヨイシヨ、〜と舟を漕いで又暗い晩に、築港へ歸つて
 来られました。

そして、何くはぬ顔で、又もこの様に、天王寺の南門に、毎日、大人しくつゝ立つて
 ゐらつしやいます。

一〇、五色の帽

お正月のお祝を目度すませました。

羊は、家内中仲よくより合ひまして、去年の午さんは、なかなか元氣がよくつて、ハ
 イハイ、ど、勢よく走つたり、又大きい聲で、ヒンヒンと鳴いたり、またなか〜、
 よく働きなさつたが、私達は、喧嘩もせず、大人しい計りで、何もようしません。し
 かし、今年は私の惠當であるから、何でも力一ぱい、世の中の爲に、働きたいものだ
 が、何をしたら一番よい働が出来るかしらんと考へました。一向よい考が出来せん
 ので、神様のお前に出まして、

「せうぞ、お教へ下さい。」と、お願いしました。

すると、神様の仰せ遊ばすには、

「お前には、外の獸よりも、もつと、よい毛を持つてゐるから、毛糸や、洋服や、外套や、帽子や、靴下、其他、いろいろの、ものがこしらへて重寶がられ
てゐるではないか。」

どの、仰せに、羊の申上げますには、

「それよりか、もつと、もつと、人の爲になることを何かいたしたいと存じます。」
ど、申上げましたら、神様は、

「それは、それは、よい心掛けである。よし／＼、お前の願を叶へて教へてやらう
それではすぐに、お前の毛から出来る品物を、何なりと作つて持つて来よ。」

どの、有りがたいお言葉に、羊は大層喜び、幾度も、お辭儀をいたしまして、

「すぐに、品物を持つて参ります。」

ど、申し上げて、急ぎ我が家へ歸りました。

羊は、自分の願を叶へて頂きましたものですから、飛び立つばかりに嬉しく、歸りの

道で、何を作つて持つて、行かうかと、考へながら、大人のものにしようか、小供の
ものにしてやうか、まあ、第一番に子供の爲になるものを作り、それから次に、大人の
ものを作らうと、思ひました。

子供さんのものは何にしよう、首巻がよからうか、手囊を作らうか、いや、シャツが
よからう、いや／＼、靴下をど、喜び勇んで種々考へて居る内に、早や、我家の門口
に歸つて居りました。

家に歸つてからも、いろいろ相談いたしました、頭と申すものは、一番、大切なと
ころであるから、この頭を大切にまもるのには、帽子がよからうと、申しましたら、
羊の仲間は何れもア………帽子がよいといつて、直に相談がまどまり毛糸を持つて、
赤、青、黄、黒、白の五色の帽子を作りまして、善は急げと、早速神様の御前に持つ
て参りました。すると、神様は、

「よく、出来上つた。」

ど、非常におほめ下さいまして、一々帽子をお手にお取り上げになりました、

「あゝ、美しい帽子だなあ、よしよし、此の帽子を被つた子供は、直に五つの癖が直るやうにしてやらう。」

と、仰つて、其帽子をお被りになり、早く子供の集つてゐるところに、持つて行つてやれこの仰せで御座いました。

羊「その、五つとは、如何なるもので御座いますか。」

「フン、其の五つか、赤の帽子は元氣帽、青の帽子はニコニコ帽、黄の帽子は指喰へん帽、黒の帽子は鼻たれん帽、白の帽子は仲よし帽である、是を被れば、直に其癖がなほるのである。」

この仰せに、羊は大層嬉しく、厚く厚く御禮を申し上げて、持つて歸りました。

羊は、この帽子を、どこへ持つて行つて上げやうかと考へ、近くに幼稚園のあるのに氣が付いて、勇んで、幼稚園に持つて参りまして、先生に差上げました。

先生も、羊の親切なことを聞いて、大層喜ばれ、何はともあれ、早速、赤色の元氣帽を、火鉢にばかり、かぢり付いていて、遊ぶことの大きらひな子供に被せましたら、

それは、それは、大元氣になりました、火鉢の傍を直に離れて、元氣に庭の中を飛び廻り、氣持よく運動をする様になつて、青い顔が、今までと違つて、林檎のやうになつて、友達と一緒に遊ぶ様になりました。

次に今度は、何時もフクレ面計りして、ベソベソ泣くことの上手な子供に、青色のニコニコ帽を被せましたら、急に、ニコニコ顔になりました、ほんとうに可愛らしく笑くばが出来て、お友達同志とも、面白そうに笑つて、遊ぶ様になりました。

其の次には、白色の仲よし帽を、誰とでもよく喧嘩をする怒り虫の子供に被せましたところが、今までは何でも彼でも皆自分一人の物のやうに、玩具を取り上げて、誰にもかしてくれませんでしたのが、友達にも分けてくれるやうになりましたので、喧嘩も出来ず、又、腹もたてることもなくなつて、友達に親切にする様になりましたので皆に好かれて、仲よく遊ぶやうになりました。

其の次は、いくら先生から、お鼻汁をおかみなさいと、注意されましたも、直に忘れてしまひまして、何時も鼻汁を垂れて居りますので、鼻の下には、二本のレールが出

来て居ります子供に、黒の鼻たれん帽を被せました。

すると、直にハンカチーフを取り出しまして、よく鼻の下が、汽車や電車を走らせんでも、よい様になりました。

今度は、残つてゐる黄の指くはへん帽を、よく指をくはへたり、何でもよく口の中に入れる子供に被せて見ました。

すると、今まで前掛のふちをくはへたり、又は、指の爪をしがんだりした癖が、すっかりなくなつて、其のおかげで、指の爪の中の虫が、お腹の中へ入ることが出来ないやうになりました。

斯のやうに、どの子供も悪い癖がなほり、元氣よく、ニコニコ、と、仲よく遊び鼻たれることもなくなつて、日本一のよい子になりましたから、幼稚園の先生は、大層お喜びで、これも皆、羊のおかげだと、仰つてお禮に羊さんの一番好きなもの、御馳走いたしました。

其の御馳走は何でせう。それは紙でした。

羊さんも、大層喜んで、御馳走になり、神様にも御禮を申し上げ、また、先生にも、御辭儀をいたしました。

その時、羊さんのこはそうなる角も曲つたので、でも曲つて居りますのです。

一一、蟻

或所に牛飼のお爺さんがありました。毎日牛を連れて山へ行つて、樹の下に腰をかけた、牛の番を致して居りました。其本の根のところに、蟻が巣をつくつて居ました。毎日お晝になるとお爺さんが其處に来て、お辨當を食べます。すると屹度蟻が出て参りますから、お爺さんは、可愛らしく思つて、お辨當の御飯を少しづつやつて居りました。

ところが蟻は始の中は少しの御飯を貰つて、大そう喜んで居りましたが、後には段々慾深くなりまして、お爺さんの知らぬ間に、まだお晝にならないのに、お辨當の袋の

中へ入つて食べました。

お晝になつて、お爺さんが袋を開けて見ると、御飯が眞黒に澤山の蟻がたかつてゐましたから、お爺さんは大層怒つて、蟻共を吹き飛ばしました。

蟻は吹き飛ばされて頭を打つたり、脚を折つたりして、甚い目に遇ひました。蟻共は餘りに甚い目に遇ひましたから、堪りません。直ぐ天の神様のところへ参りまして、お爺さんのことを大層悪く申しました。

「神様。神様、あそこに居るあのお爺さんは、御飯を粗末に致しまして、地面に捨てるやうなことをする奴です。」と告げました。

神様は蟻の言ふことを、お聞きなさいまして、

「誰か他に其れを見たものがあるか。」

とお尋ねなさいました。

「ありません。」と蟻が申し上げますと、

「其者を呼べ。」と神様が仰いました。

蟻は直ぐに蜘蛛を連れて参りました。蜘蛛は神様の前へ出まして、

「蟻の言ふのは嘘で御座います。山の中にはお膳も、お茶碗も御座いませぬから、

少し位御飯粒のこぼれることもありませんが、あのお爺さんは大そうお行儀のよい人ですから、御飯を粗末にするやうなことは御座いませぬ。蟻は餘り慾張つて、澤

山御飯を食べやうとして、吹き飛ばされたので御座いませぬ。」

と申し上げました。

神様は蜘蛛の言つた事をお聞きなさいまして、蟻を大層お叱りなさいました。そして風の神を呼んで、

「此の蟻を一疋も残さず、地面へ吹飛ばして了へ。」と仰いました。

風の神は大きな袋を背負つて、お出でになつて、袋の口をお開けになりますと、草や木も倒れさうな酷い風で蟻共を吹き飛ばしました。

蟻共は高い空から一疋も残らず、地面へ落ちましたから堪りません。腰の骨を打折り

来て居ります子供に、黒の鼻たれん帽を被せました。

すると、直にハンカチーフを取り出しまして、よく鼻の下が、汽車や電車を走らせんでも、よい様になりました。

今度は、残つてゐる黄の指くはへん帽を、よく指をくはへたり、何でもよく口の中に入れる子供に被せて見ました。

すると、今まで前掛のふちをくはへたり、又は、指の爪をしがんだりした癖が、すっかりなくなつて、其のおかげで、指の爪の中の虫が、お腹の中へ入ることが出来ないやうになりました。

斯のやうに、どの子供も悪い癖がなほり、元氣よく、ニコニコ、と、仲よく遊び鼻たれることもなくなつて、日本一のよい子になりましたから、幼稚園の先生は、大層お喜びで、これも皆、羊のおかげだと、仰つてお禮に羊さんの一番好きなるものを、御馳走いたしました。

其の御馳走は何でせう。それは紙でした。

羊さんも、大層喜んで、御馳走になり、神様にも御禮を申し上げ、また、先生にも、御辭儀をいたしました。

その時、羊さんのこはそうな角も曲つたので、今でも曲つて居りますのです。

一一、蟻

或所に牛飼のお爺さんがありました。毎日牛を連れて山へ行つて、耕の下に腰を掛けて、牛の番を致して居りました。其本の根のところに、蟻が巣をつくつて居ました。毎日お晝になるとお爺さんが其處に来て、お辨當を食べます。すると屹度蟻が出て参りますから、お爺さんは、可愛らしく思つて、お辨當の御飯を少しづつやつて居りました。

ところが蟻は始の中は少しの御飯を貰つて、大そう喜んで居りましたが、後には段々慾深くなりまして、お爺さんの知らぬ間に、まだお晝にならないのに、お辨當の袋の

中へ入つて食べました。

お晝になつて、お爺さんが袋を開けて見ると、御飯が眞黒に澤山の蟻がたかつてゐましたから、お爺さんは大層怒つて、蟻共を吹き飛ばしました。

蟻は吹き飛ばされて頭を打つたり、脚を折つたりして、甚い目に遇ひました。蟻共は餘りに甚い目に遇ひましたから、堪りません。直ぐ天の神様のところへ参りまして、お爺さんのことを大層悪く申しました。

「神様。神様、あそこに居るあのお爺さんは、御飯を粗末に致しまして、地面に捨てるやうなことをする奴です。」と告げました。

神様は蟻の言ふことを、お聞きなさいまして、

「誰か他に其れを見たものがあるか。」

とお尋ねなさいました。

「あります。」と蟻が申し上げますと、

「其者と呼ばへ。」と神様が仰いました。

蟻は直ぐに蜘蛛を連れて参りました。蜘蛛は神様の前へ出まして、

「蟻の言ふのは嘘で御座います。山の中にはお膳も、お茶碗も御座いませぬから、

少し位御飯粒のこぼれることもありませんが、あのお爺さんは大そうお行儀のよい人ですから、御飯を粗末にするやうなことは御座いませぬ。蟻は餘り慾張つて、澤

山御飯を食べやうとして、吹き飛ばされたので御座いませう。」

と申し上げました。

神様は蜘蛛の言つた事をお聞きなさいまして、蟻を大層お叱りなさいました。そして風の神を呼んで、

「此の蟻を一疋も残さず、地面へ吹飛ばして了へ。」と仰いました。

風の神は大きな袋を背負つて、お出でになつて、袋の口をお開けになりますと、草や木も倒れさうな酷い風で蟻共を吹き飛ばしました。

蟻共は高い空から一疋も残らず、地面へ落ちましたから堪りません。腰の骨を打折り

ました。それですから今でも蟻の身頭は中央のところが細くなつてゐます。神様は蜘蛛が正直に話したのを、お賞めなさいまして、御褒美に美しい絲を下さいました。蜘蛛は其絲にぶら下つて、天から降りました。それですから今でも其時のことを思ひ出して時々高い樹からぶら下ります。

一一、蟹の横這ひ

上は人間より下は地の中に棲む蚯蚓迄すべて生きて歩く事の出来る者はみな、自分の目の向いて居る方へ眞直に歩いて行きます。處が只一つ彼の蟹といふ者は、目は前に向いて居るのに、其の動く時には横へくど這つて行きます。何と可笑いぢやありませんか。それは理由のある事で今其の理をば一つ、お咄し致しませう。昔々大昔の事です。海の底の龍宮で何かお祝がありました、お酒宴と云うて御馳走事が初まりましたが、其時龍王様の御領地に平常棲んで居る者の中で、章魚の入道と

鯛の左衛門と、それから蟹の平内とが呼ばれてお客に参りました。何しろ龍王様のお招きですから、中々倉忽には出来ません。そこで章魚の入道は緋の衣に金襴の袈裟、鯛の左衛門は茶の大紋。蟹の平内は石垣小紋の上下、孰れも大禮服を着けまして、龍王の御殿へと参りました。纏て龍王の御前に三人が平伏致しまして、

章魚「お招きによつて章魚の入道」

鯛「鯛の左衛門」

蟹「蟹の平内、参上致しまして御座ります。」

と、申上げますと、龍王は御覽になつて、

龍王「イヤ何れも打ち揃うて、よくこそ参つた。」

章魚「大王様には増々御機嫌宜敷麗しいお顔を見まして、嬉しう存じ奉ります。」

と、章魚は口をトントんがらかして、見せ物の口上の様な事を言ひますと、龍王は御満足で、

龍王「其方共達者でめでたい〜扱今日は心祝ひがあつて、何はなくとも酒肴を取らずぞ。遠慮せずゆつくりと致せ。」

三人「有難う存じます。」

と、これから三人共は、龍王様の前に座りますと、間もなく家來の小魚が段々と運び出す御馳走を山のやうにそこへならべました。

龍王「サア。遠慮なく食べ初めるがよい。」

三人「それでは頂きます。」

と、てんでにお盃を受けましてお酒を頂き、又お箸を取り上げて、そろ〜お肴を食べ初めました。

すると蟹の平内は何ういふ理か、自分の前のお肴は食べず、持前の鉢を伸ばして兩方にある、章魚や鯛のお肴をチヨイ〜盗んで食べて居りますのを、龍王は早くも御覽になつて、

龍王「これ〜、蟹の平内」

蟹「へイッ」

龍王「先刻から見えてゐるに、其方は自分の肴を食べず鯛や章魚の前の物を、コソ〜摘んで食つて居る様ぢやが、何故其の様な事を致すのぢや。」

と、お叱りになりますと、蟹は恐れ入つて、

蟹「誠にどうも申譯が御座いませぬ。これからは、屹度氣をつけますので御座います。」

と、其時は氣をつけて自分の物斗り食べて居りましたが此蟹と言ふ奴は、よく〜意地の曲つた手癖の悪い奴と見えまして、暫時たつと又ソロ〜横に出して、隣の物をチヨツと盗んで食べます、龍王は又それを見つけて、

龍王「コリヤ〜。平内其方は又隣の物を取つたな」

蟹「へイ〜。」

龍王「へイ〜では無い。取つたに相違なからう。」

と、睨めつけられまして、蟹は一言も御座いませぬが、根が負け惜しみの強い奴です

から、只詫るのも悔しいと思ひまして、却つてズウ〜しう、

蟹「いかにも取りまして御座います。」

龍王「コリヤ。先には是から氣を付けますと言ひ乍ら何で又盗んだか。」

と、龍王も少々御立服の體で仰る。蟹はよせばよいのに

蟹「如何にも氣を付けますつもりで御座いますが、何分にも私の手は横について居りますから、致し方が御座いません。」

と、口答を致しますと、龍王は赫と急ぎ込んで、

龍王「コリヤ。何と申した。其方の手は横について居ると申したな。」

蟹「はッ」

龍王「然らば今日から決して自分の前の物を取つてはならんぞ。其方の様な横に手のついたものは最早や目通り叶はん。トットと下りおろう。」

と、殊の外御腹立で、蟹をば御殿から追ひ出しておしまひなさいました。

扱蟹は龍王の御叱りにあうて其儘御殿を追ひ出されましたが、それからといふものは、

此の罰で自分の前のものは取れません。仕方がないから横向きになつて物を取る様になりましたが、遂には歩くのも横向きになり、果ては蟹の横這ひと人にまで笑はれる様になりました。

一三、お柏ねずみ

明日は男のお節句だといふので、太郎さんのおうちでは、みんなでお柏餅を拵へました。すつかり出来上つた時分には、もう電燈がついてゐました。

みんなが明日のお節句を楽しみに、お床の中へ入りましたが、くたびれてゐるので、直ぐに寝てしまつたと見えて、あちらでもこちらでも、グウ〜いびきの聲が聞えます。すると天井裏に住んで居る忠吉父さんと、忠子お母さんの二匹の鼠は、七匹の子鼠をつれて、ゾロ〜と下へ下りてまゐりました。

「今日は何だか下で、一日大さわざをしてゐましたね、きつと何か拵へたでせうか

ら、みんなで噛つてやりませうよ。」といったづらな子鼠達は、お座敷や、お部屋をかけたまはつてさわがして居りましたが、そのうち一匹がお大將人形の飾つてある側の方の棚の上のお柏餅を見つげ出して、他の仲間を呼びました。

「有つたく、澤山おいしさうなお餅があるよ、みんないらつしやい〜。」

何しろ今日一日何にも食べずに、天井にかくれてゐたのですから、鼠達はおなかがベコ〜です。子鼠の呼ぶ聲に、みんなが夢中になつて、とんで行きました。

めい〜お餅が少しお柏の葉からそとへ出てゐるところから、噛り初めました。中の方にはアンコがあります。

「アツあんこがある、おいしいあんこが一ぱい入つてゐる」と大喜びで食べてゐます。

だん〜端の方からお餅を食べて、中へ中へと食べていきますので、鼠の身体は段々お柏の葉に包まれて一つ食べてしまつた時分には二つに折つた葉の中へ、お餅の代りにすつかり鼠のからだが入つてしまひました。

一つ食べるともうおなかが一ぱいになりますし、木の葉のお蒲團がいゝ、工合にかかつて居ますので、鼠達はいゝ氣持にねむくなつて、みんなそろ〜ねこんでしまひました。

そのうちに夜が明けて、太郎さんも、太郎さんのおうちの人達も、起きて來ましたが、鼠達は昨夜とんで歩いたので、くたびれてまだね入つて居ます。

そろ〜お客様がいらつしやいましたが、まだ知らずにねてゐます。

そろ〜お柏餅をお客様の前へ持ち出しましたがそれでも知らずによくねてゐます。

「うちで拵へましたからかつこうはわるうございですが、そのかはりアンコはどつさり入つてゐますから、どうぞおわがり下さいませ。」

と、お母さんがおつしやいましたので、お客様達はめい〜一つ宛お柏餅を取つて食べやうといたしますと、中に居たお寢坊さんの鼠はこの時やつと眼が醒めて、とび出しました。鼠もびつくりしたでせうが、お客様の方はなほびつくりして、とび上りました。

お母様も太郎さんも其處に居た人達は、みんな胸がどきどきする位びっくりしました。鼠達もわはてしまつてどちらへ逃げたらよからうかと、お座敷中をマゴゴとして居る中に、みんな残らず捕まつてしまひました。そして忠吉も忠子も子鼠達もみんなしぼられて、交番所へつれて行かれました。きつとひどく叱られたでせう。

一四、兄さん

或家に太郎さんと、妹のお千代さんと、又其妹のお龜さんがありました。又この家には、お玉といふ可愛らしい犬が一疋居りました。何時も三人の子供等からお菓子を貰つたり、鬼事の仲間へ入れて貰つたりして、仲よく遊んでゐました。

或日太郎は幼稚園から歸つて来て、「唯今」と、挨拶をしますと、お母様はニコニコな

さいまして、

「太郎やお歸り、今日も叔母さんのお宅から好いものを戴いたから、お前達三人に分けて上げやう、それからね、私は今日お使ひに行つたのだよ、すると可愛い、玩具が、澤山何時ものお庭にあるぢやないか、お土産にしようと思つて、三人に買って歸りましたよ。嬉しいかへ、まあ嬉しうな顔。」

と、お母様は、次の室へ取りにお出でになりました。

太郎は大喜びで、お千代とお龜を呼んで、行儀よく待つて居りますと暫くして、次の室からお母様は、玩具をかへてお出でになりましたが、太郎は僕のは何だらうと、一生懸命に見てゐますと、

「何時も仲よくする御褒美ですよ。」

と、お言ひになつて、立派なお菓子を三人同じ様に紙に包んで、其上へ太郎には喇叭、お千代とお龜には可愛らしいお人形を添へて下さいました。

三人は、「嬉しい〜」。といひながら様先へ出て、お菓子の紙包を開いて、つまんだり

押へたりして楽しんで居りましたが、お千代とお龜は、お菓子も食べたいが、お人形も抱きたいので、

「姉さんのお人形と、私のと遊ばせませうね。何といふ名にしたらよいだらう、私のはお花さんよ、姉さんのはお春さんといつたらいいわ。」

と、夢中になつて喜んで居りました。兄さんは喇叭も嬉しいが、お菓子もたべたい、ちよつと一つと喰べて見ますと、美味しいこと、いつたら、ほゝべたが落ちはしないかと心配する位です。もう一つ、もう一つと喰べる内に、段々妹のより自分の方が少なくなつてきます。

「之は惜しいぞ、食べたいし、惜しいし、困るなあ、食べても減らぬ工夫はないか知らん。」

ふと妹二人の方を見ますと、お菓子は其儘で、一生懸命に人形を持つて遊んで居ます。

「そうだ、あれを食べればいいんだ。」
と、急に妹のがはしくなつて、一つ二つ食べました。

丁度其時後の方で、ガサ／＼ガチャ／＼と音がしますから、「何だらう」と驚いて見ますと、何時の間にやら玉が来て、兄様のお菓子を皆食べてしまつたばかりでなく、大切な喇叭までくはへて、走り廻つてゐます。太郎は妹のお菓子を二つ程食べたばかりに自分のものをすつかり喰べられてしまひましたのを見て、急に悲しくなり、ワツと泣き出しました。

妹達は驚いて見ますと、右の始末ですから、お母様のところへ告げにまゐりました。犬は何にも知らず、又何時もの通り太郎さんが、私に下さつたのだらうと思つて、食べたり、喇叭を持つて遊んだりしたのですから、太郎さんの泣いてゐるのを見て、呆れて居ます。

お母様は次の部屋からお出でになつて、泣いて居る太郎に仰るには、

「お前は、他のものを食べたりなんかするから、自分のものを犬に食べられてしまつたのですよ。」

一五、狐の袋

或る時狐が何かよい御馳走を見つけたいものだと思つて、大きな袋をかついで、お山の奥から出て来ました。

大きな木の下まで来ると、上の方をブン／＼云つて、大きな蜂がとんで居ましたからつかまへて袋の中へ入れました。

それからドン／＼歩きつゝ一歩の家へ来ました。狐はその家のおばさんに。

「一寸そこへ行つて来る間此袋を預つて下さいませんか。」と、たのみました。

「よございませすとも置いていらつしやう。」と、おばさんが云ひました。

「ぢやどうぞ氣をつけてあの袋の口をきつと開けないやうにして下さいよ。」と、云つて狐は出て行きました。



狐の姿が見えなくなると、早速おばさんは、袋の口を角の方から一寸あけてのぞいて見まして。

ブン／＼と中から蜂が飛び出しました。

そしておばさんの家の鶏が、バクツと蜂をとつて食べてしまひました。暫くして狐が歸つて來ました。そして袋の中を見て、

「オヤ私の蜂はどこへいつた。」

と、いひました。

「マアお客様、私何が這入つてるかと思つて、一寸角の方から開けて見ましたら蜂がブン／＼飛び出しましたので、家の鶏がとつて食べてしまひました。」

「よし／＼それぢや其鶏を持つて行くよ。」

と、言つて鶏を袋の中へ入れて、ドン／＼歩いて二番目の家の處まで來ました。

狐は其家のおばさんに、

「一寸そこへ行つて來る間、此袋を此處に預つて下さいませんか。」

「ようございませすとも、置いていらつしやう。」

「ぢや氣をつけて袋の口を開けないやうにして下さう。」

と、言つて狐は出て行きました。

狐が見えなくなるど、おばさんは袋の隅を、ソツとあけてのぞいて見ました。

バタバタバツと鶏が飛び出しました。

そしてコケツコーと鳴きました。

するとおばさんのお家の猫が、とんで来てバクツと小さい鶏を食べてしまひました。

間もなく狐が歸つて來ました。

狐は袋の中を見て、

「オヤ私の小さい鶏は、何處へ行つたらう。」

「マアお客様、私が一寸何があるかと思つて、袋の隅の方を開けて見ましたら、小

さい鶏がバタ／＼と飛び出しました。そしてコケツコーと鳴きましたので、家の猫

がとんで来てバクツと食べてしまひました。」

「よし／＼それぢや其猫を持つて行くよ。」

と、言つて狐は猫を袋の中に入れて、ドン／＼歩いて三番目の家まで參りました。狐

はそのおば様に、

「一寸其處へ行つて來る間、此袋を預つて下さいませせんか。」

「ようございませすとも置いていらつしやう。」

「ぢや氣をつけて袋の口を開けないやうにして下さう。」

と、いつて狐は出て行きました。

狐が見えなくなるが早いか、おばさんは袋の口を開けてのぞいて見ました。

するとニヤ／＼オニヤ／＼オニヤ／＼と猫が出て來て、グツと足をふんばりました。そしてドンド

ン遠くへ逃げて行きました。間もなく狐は歸つて來ました。そして袋の中を見て、

「オヤ私の猫は何處へ行つたらう。」

「マアお客様何が這入つて居るかと思つて、私が袋を一寸開けましたら、猫がどび

出しました。そしてドン／＼逃げ出しました。それで家の子供が追ひかけましたけ

れど、とう／＼とこへかいつてしまひました。」

「ようございます、それぢや其子供をつれて行きますよ。」
と、いつて、狐はおばさんの子供を、袋の中へ入れて、ドン／＼歩いて四番目の家まで來ました。

狐はそのおばさんに。

「一寸其處迄行つて來る間、此袋を此處へ預つて下さいませんか。」

「ようございますとも置いていらつしやい。」

「ぢや氣をつけて袋の口を開けないやうにして下さい。」

と、云つて狐は出て行きました。

さあ今度はどうなつたでせう、おばさんは丁度おかきを焼いて居た處でした、そしておかきを焼いてしまつた時、

「お母さんわたしに頂戴。」

と小さい子供がさわぎました。そして袋の中に居た子供は、おかきのおいしい香をか

いで大きな聲で、

「お母さん私にも頂戴。」

と、言ひました。

おばさんは「オヤ袋の中で聲がする」と言つて袋の口をあけましたら、中から可愛らしい子供が出て來ました。

おばさんは其子の代りに家の犬を袋の中に入れて置きました。

それからおばさんは其子供にも家の子にもおかきをわけてあげました。

そして皆大喜びでしたけれど袋の口はもこの通りチャンと結んでありましたから、狐は今度は誰も開けなかつたと思つて、其まゝ袋をかついでドン／＼歩いて森の中へ來ました。

すると、「ワン／＼／＼。」と、犬がとび出して狐を食べてしまひました。

一六、因幡の兔

昔隠岐の島に、白兔が一疋居ました。

其白兔がどうかして、因幡といふお向ひの國へ渡りたいと、毎日々々思つてゐましたが、兔は海を泳ぐことが出来ませんから、どうしたら行けるであらうかと、思つて、海の方を眺めて考へて居ました。

ある日のこと、向ふの方から大きな鰐が一疋泳いで來ました。兔は鰐に、

「お、鰐さん鰐さん、今日はあなたと一緒に遊びをさせうか、あなたのお友達には、どの位ありますか、一度呼んで來て、因幡の國までついでに連れて行かしてやらうか、あなたのお友達に、私の友達とどつちが多いか、比べて見ませう。」

と、言ひました、鰐はそれを聞いて、

「私の友達には、それはそれは澤山ありますよ。」

と、言つて直にお友達を呼んで來て、廣い廣い海の上に、一ぱいならべましたら、隠

岐の島から、因幡の國までの海は、すべて鰐でつながつてしまひました。

すると兔は、その鰐の背中をびよんびよんと、飛んで

「一匹二匹三匹……」

と、數へてとうとう因幡の國へ渡りました。そして

「大きに御苦勞様、もうあなたには、これで御用はありませんよ、さようなら。」といつて逃げやうとしましたから、鰐は大そうおこつて、

「やあ、この横着者奴。」と毛をみなむしり取りました。

兔は毛をぬかれて、痛くて痛くてたまりませんから、ひいひいと泣いて居ました、そこへ大勢の神様がお通りかへりになつて、兔に、

「何故、お前はそんなに泣いてゐるのか」

と、お尋ねになりますと、兔は泣きながら、正直に今迄の御話をくはしういたしますと、神様は、

「それはお前が横着だ。あの海の水をあびて砂の上でころがつてをれ。」といつてあ

ちらへ行つておしまひになりました。

兎は、その通りにしますと、前よりも身体がよけいに、いたくなつて、ビリビリして苦しくてたまりませんから、大きな聲を出して、泣いてゐました。

そこへ又大國様といふ、やさしい神様が、大きな袋をかついで、にこにこしながら、お通りかゝりになりました。兎が苦しうに泣いてゐるのを御覧になつて、

「お前は何故そんなに泣いてゐるのか。」とお尋ねになりました。

兎は今迄のことを洩らさず、正直にお話しますと、神様は、

「それはお前が悪い、鰐をだましたから、そんな目にあふのだ、今度からはきつとうそなぞいつてはならんぞ、それではよいことを教へてやらう。向ふのお池の鹽氣のない水で、よくからだを洗つて、がまの穂をしいて、その上で静かに寝てをれ。」といつて、あちらへいつておしまひになりました。兎はすぐ其通りにしますと、今迄の痛みは次第に薄らいで毛もだんだん生えて来て、何時の間にかやら直つてしまひました。

一七、狐の自慢

或處に一匹の狐がありまして、つくつく考へて居りましたが、自分は何でも獸の王になつてやらうと、獨りほくほく喜んで、穴からとび出し道を歩いて居ますと、鹽て一匹の狐に出逢ひましたから、こゝぞと思つて首を高く胸を張つて、威勢を見せましたので、友達の狐は喫驚して小さくなつて居ました。

前の狐は之を見て友達の狐を呼びながら、
「オイ、此方へ寄れ、己を乗せて行け。」

と、言ひました。

友達の狐は此見事に恐れて、前の狐の云ふ通りに乗せて歩き出しましたが、間もなく又二番目の狐に逢ひますと、狐に乗つて居る狐は、首を上げ胸を張り出して、

「オイ己の馬の口を取れ。」

と、云ひつけて、二番目の狐をも又家來にしてしまひました。

一體此あたりの森の中には、澤山の狐が棲んで居りましたが、同じ仕方で五六十匹の狐を残らず家來にして、自慢さうに歩いて居ました。

すると今度は一匹の犬に出逢ひましたが、自慢狐は自分は、もう獸の王になつたつもりですから、直に其犬にむかつて、

「コラ犬、私は王様だから降参してはどうか、そして私をのせて行け。」
と、言ひました。

犬は狐の見幕に恐れて、一言もなく家來になつて、狐を乗せて仲間の所を歩き、森の中の犬を残らず降参させてしまひました。

かう云ふ風で、狐も犬も狸も鹿も兎も熊もみんな、狐の家來になりました。

狐はだん／＼気が大きくなつて、次には象も家來にして其背中に跨り、さも自慢さうに歩いて居ましたが、是を見つけたのは他の者でもない獅子であります。

森の中のいろ／＼の獸共が狐の家來になつて、ウヨウヨ歩いて居るのを見た獅子は、日頃の勇氣も何處へやら、

「オヤ／＼これは大變なことになつた、私も今迄は、自分が獸の王だと思つて居たのに、是はえらいことぢや、あの狐には逆も叶はぬ。」

と、溜息をついて見て居ました處が、狐はいろ／＼の獸を家來にした上は、一番強い獅子をも家來にして、威張つて見たいものだと思つて、

「オイ／＼其處に居るのは、獅子ではないか、王様の前へ来て敬禮を致せ。」

と大聲あげて呼び立てますと、獅子は何と思つたか、静々と狐の前に来まして、叮嚀にお辭儀をしましたので、狐はいよ／＼のぼせ上り、

「己は其方の背中に乗つて見たい、熊よりも象よりも、其方の背中に一番乗心地がよい様に思ふぞ。」

と、さも横柄に申しますと、獅子は、

「ハイ王様におなりなさいました上は、チア御遠慮なくおのり下さいませ。」

と、快く乗せました、そこで狐は心の中に自分は象の王になれば、もう充分だと思つたのに、獅子の王になる事が出来たとは何と云ふ都合のよい事であらう。

此上は猶多くの獅子を集めて、家來にしやうと、かう思ひ乍ら、獅子の口を左右から象にとらせて、澤山の獸を後に従へ首を上げ胸を張り出して進みました。獅子と云ふ獸は、毎日一度づゝ吼えるもので、其聲をきく時はどんな強い獸でも、身を慄はせて其場に斃れる程ですのに、今日は吼えませんので、他の獸達もみんな如何した事かと不思議に思つてゐました。

すると其日の正午頃になつて獅子は、足を止め、頭を高く上げ胸を張り出して、體の毛を立て、眼をむいて後や左右の獸共を見廻しますから、他の獸達はどうなる事かどうもう身を慄はせて居ました。

中にも背中の狐は何だか氣味が悪く、危く落ちさうになりましたが、こゝで弱い顔を見せては、王の名折れになるからと、しつかり鬣をつかんで我慢して居ましたもの、矢張り體がたゞゞ震へて仕方がありません。

所が獅子は、かうして充分に身構へをして一聲高く、

「ウオーツ。」

と、吼え立てました。

其聲は百千の雷が一時に落ちて來たかと思はれるほどの物凄さで、多くの獸達はベツクゞ地面に倒れたまま、氣を失つて二度と起き上る事さへ出来ませんでした。

自慢狐は如何したかと思つて、獅子の背中から振りおとされて、地面の石で頭を割られ、其儘敢へない最後を遂げて死んで居りました。

獅子は此有様を見廻しながら、

「馬鹿な狐め、獸の王様だと聞いたればこそ、私も大人しく乗せてやつたのに、只一聲でやられてしまふとは、よくよく馬鹿な奴ぢや。」

と、笑ひ乍ら森の奥へ行つてしまひました、

すると外の獸達も身慄ひし乍ら、

「もうくゝあんな真似はするものぢやない。」

と、皆こそくゝと逃げて行きました。

一八、蟹崎と龜崎

昔むかし兔うさぎと龜かめが走り競くらべをして、どちらが勝ちましたか知しつてゐるでせう。龜かめが勝ちましたね。それで龜かめの子こや孫まごは、兔うさぎ位くらいなら何時いつでも勝かてると思おもひました。或あるひ日ひ一びつ疋びつの龜かめがちよこ〜と、日ひ當あたりへ出でて、

「誰たれか来こないかなあ、来くれば走はり競くらべをしよう。

屹きつこ度きつこ勝かつてみせる、私わたしの祖おぢい父ちちさんは兔うさぎにだつて勝かつたんだもの。」

と、いつて居ゐますと、向むかふから拾ほん本ほんの足あしと、鉄はさまを二ふたつ持もつて横よこに這はつて来くるものがあります。これは何なんでせう。それは蟹かにです。がさ〜と、龜かめのところへまゐりました。龜かめは好いい友とも達たちが来きたと思おもつて、

「蟹かにさん今日こんにちは。」

「はい今日こんにちは。」好いいお天てん氣きでございますね。」

「お天てん氣きがよいので、向むかふの〜松まつつ木きがよく見みえますね、あの松まつの木きまで、どち

らが早はやいか、走はしり競くらべをしやうではありませんか。」
と、言いひますと、蟹かには飛とび出だした目めで、向むかふ、いや横よこを見みますと、横よこにも一ほん本まつの木きがあります、

龜かめの見みた松まつの木きと、蟹かにの見みた松まつの木きと同おなじものと思おもひまして、

「よろしい、私わたしは足あしが十じゅう本ほん、貴あなた公こうは四よん本ほんですから、私わたしの方ほうが早はやいに速すみひない。」

と、言いひますと、龜かめは短みじい首くびを左ひだり右みぎに振ふつて、

「いくら足あし數かずが少すくなくても、昔むかしから龜かめは早はやいものですよ、あなたさいてゐるでせう。

私わたしのお祖おぢい父ちち様さまが兔うさぎの樣やうな早はやいものにも勝かつたといふことを。」

と、二ふた匹びつ共ども大たい層そう偉えいばつて居ゐりました。龜かめは、

「それぢやどちらが勝かつか、走はしつて見みればわかることですから、さ〜一いち走はしり走はしりま

せう、さ〜あの松まつの木きまでですよ、一、二、三。」

と、龜かめは首くびを前まへに出だして、向むかふの松まつを目め的に四よつつの足あしに力ちからを入いれ、汗あせを流ながしながら、よち〜と行いき、蟹かには横よこの松まつを目め的に、重おもい甲かづを十じゅう本の足あしに支さへ、目めをさよろつかせ

てがさ／＼、漸々自分の思ふ松の木につきました。

「あーやれ／＼、やつと着いた、私の方が矢張一番だ、嬉しい／＼。」

ど、言つてゐました。一方龜の方では、

「蟹はどうしたのだらう。」

蟹は、「龜さんはどうしたのだらう。」

ど、お互に待つてゐました。幾ら待つてもどちらとも参りません。それはその筈、目的のところが違つてゐたからです。どちらもし少し腹が立つて來まして、

「一體どうしたのだらう、弱いなー。」

ど、言つて居ましたが餘り退屈ですから、又せつ／＼と歸つて來ますと、どちらともばつたり元の場所に出會ひました。兩方とも怒つて、「一體龜さん何をしてゐたんです、松の木の處で待つてゐたのに何時まで經つても來ないで、」

「それはこちらの言ふ事、蟹さんもあの兎のやうに、晝寝をしてゐたんですか。」

「いゝえ、それはあなたです。」

「いや、あなたです。」

ど、蟹は泡を吹いて怒り、龜は大きな口を開けて言ひ會ひましたが、はてしがありません。

「それでは道で寝たりなんかせずにもう一度、一、二、三。」

ど、又よち／＼がさ／＼と走つて、一疋は向ふの松に、一疋は横の松の木に着きました。たが、またいくら待つても來ません。

兩方とも怒つて、今度こそは勘忍することが出來ると、ブツ／＼言つて元にかへりま

すと、どうせう又二疋一緒に歸つて來ました。どちらも大變怒つてゐますから、顔を見合すなり、物を言はずにつかみかかりました。

所がこの近所に、太郎といふ子供がありました。

丁度幼稚園から歸りに此處を通りまして、之を見て中に分け入り、「まあどうしたのだ。」と、聞きますと、右の次第ですから、可笑しくもあり、又可愛さうにも思つて二

正に松の木を間違へて居た事を話してやりました。

二正はあーさうであつたかと、初めて譯がわかり、すまぬことをしたと、兩方から謝罪りました。

「もう之から喧嘩等はしませないな」

と、約束をして、それから後は仲よく暮しました。

一九、風船球

お祭りの日に、澤山の人が神様にお参りをしてゐる、其人込みの中に、風船球を賣るお爺さんが、精出して風船球をこしらへて賣つてゐました。

お爺さんは風船球を澤山拵へて、多くの人の目につくやうにと思つて、ゴム球をふくらして、賣ることを忘れて、拵へる事ばかりに一生懸命に精出して、出来ると一つ宛自分の腰掛に括りつけて、百も二百もまだまだ澤山こしらへて結びつけましたので、

お爺さんのからだのわきから頭の上まで、風船球が山のやうに重り合つて、お爺さんのからだが見えぬ位になりました。

すると腰掛が少し、フハフハ動き出して、お爺さんの體が少し持ち上げられる様な心地がすると、澤山の球は、スウーと上へ昇つて、お爺さんは、腰掛と一緒に澤山の風船球に引上げられて、ユラユラとだんだん高い所へ昇つて行きました。お爺さんは、

「アー、エライコツチャ、エライコツチャ、アー面白い面白い、御堂さんの屋根も、三越の家も、天王寺の塔も、だんだん小さくなつて来る。

ヤア築港の方に、軍艦や汽船が黒豆の様に見える、

ヤア山の方に、汽車や電車が虫の匍ふ様に見える。」

と、喜んで居ましたが、だんだん高く昇つて、モ一町も家も船も汽車も、何一つ見えぬ程、高く昇つてしまひました。

サア左様になると、始めは面白くて面白くて堪らず、うかうか彼方此方を見おろして、楽しんで居ましたが、そろそろ心持悪く恐しくなつて來ました。

あたりを見廻すと、雲の中には雪が澤山あります、此雪が地面の上に降つたなら、家も人も皆雪に埋れるであらうと思つた。それだから寒い。お爺さんは腰掛から落ちないやうにしつかりつかまへてゐる其の手がかぢけて、覺えぬ程冷たくなりました。その内にお腹も減つて來ました。お爺さんは早く降りたくなつて來ました。早くお家へ歸つて、火鉢の傍で温い御飯を、坊や嬢と一緒に食べたくなりましたので、お爺さんは悲しくなつて、大きな聲でオーオー泣き出しました。

いくら泣いても、其邊は雪の雲や、霞の雲や、雨の雲ばかりで、誰も助けて呉れませぬ。ふとお爺さんは一生懸命に、何うしたらよいかと考へました。

これは泣いてばかり居ても仕方がない、自分の體を上へ上へと引き上げるのは、この風船球である。此の球の瓦斯を出したならば、自分の體は地面へ降りられるのであらう左様ぢや左様ぢや、と云つて、其瓦斯を抜くことに思案を極めました。そして又考へました。

澤山の風船球の瓦斯を一度に抜いては、自分の體は腰掛と一緒に、ズデンドーと真逆

様に、地面の上に落ちて、手も足も頭もからだも、めちやめちやになるであらうと考へました。

それでお爺さんは、あはてずに風船球を一つ引き寄せて糸で括つてある所を緩めると、瓦斯はスーと抜けてしぼみます、又一つ又一つと瓦斯を抜くと、上に揚らぬやうになります。

お爺さんも腰掛も、風船球もそろそろ降りかけました。

雪の雲雨の雲霞の雲を通りすぎて、だんだん降りて來ると、誠によいお天氣で、山も海も河も町も幼稚園も見えて來ました。

お爺さんは、嬉しくて嬉しくて堪らず、腰掛にかじりついて、心を落ち付けて、風のままに揺られて、ゐますと、次第に降りて來まして、芽出たく怪我なしに、地面の上に着いて無事にお家へ歸りました。やれやれとお爺さんは安心しました。

二〇、影法師賣り

或所に與作といふ子供がありました。

ある時與作は自分の影法師を見て、こいつはうるさい、いやなやつだ。

僕が手をあげると影法師も手をあげる。歩き出すと影法師も歩き出す。欠伸をすると

影法師も欠伸をする。

こんな影法師なんぞ邪魔になるばかりで、何の役にもたたないものだ。

誰かに賣つてしまはうと思ひました。

さうして町に出てゆきまして、

「影法師、影法師、影法師はいりませんか。影法師、影法師、影法師はいりません

か。」

と、云ひながら歩いてゐると丁度夕方になりました。

すると向ふから顔の白い美しい女の子が出て来て、

「もしもし影法師を買ひませう。而しどんな影法師ですか。」と、聞きよした、

「はいわたしの影法師です。」

「あなたのですかそれでは買ひませう。」

と、約束して、女の子は行つてしまひました。

與作はうちへ歸つて、

「これで邪魔なものが無くなつてさつぱりした。」

と、言ひながら寝てしまひました。

翌る朝與作は外に出て遊んでゐました。

お日様がだん／＼高くなるのぼつて歩いてゐる人の影が皆地面にうつつてゐますが、自分

だけ影がありません。

與作は少しさびしくなりました。

向ふの方では多勢の子供が集つて、影踏をして遊んでゐます。

鬼になつた子は日なたへ出て、ほかの子の影を踏まうと追ひかけます。

ほかの子供はかけを踏まれぬ様に、キャツキャツと騒いで日かげの方に逃げて居ます。その面白さうな事、興作は飛んで行つてよりたいたいのですが、自分には影がないので寄せて貰ふことができません。

子供等は興作の來たのを見つけて、

「興作さんもおはいり、興作さんもおよりなさい。」

と、言ふてくれました。

興作がもちもちして居るうちに、一人の子が興作のうしろに影のない事に気がついて

「アラ影がない、おばけだ。」

と、言つたので皆が、

「おばけだおばけだ。」

と、囃したてて逃げてしまひました。

興作はいよ／＼悲しくなつて、溜息をしながら空を見ると、お日様が笑つていらつし

やいます。

「お日様どうぞ私にも影法師を授けて下さいお願い致します。」
と、三度おじぎをしました。

するとお日様はなほニコニコと笑ひながら、

「興作やお前の影法師を買つたのは、わたしの妹でお前も知つてゐるお月様だ。

わたしとわたしの妹とは、どんな人にも影法師を授けてゐるのだ。折角授かつた

ものを邪魔にするのはよくないことだ。これからはよく氣をつけるがよい、もう一

度おじぎをしてごらん。」

と、お言ひになりましたから、興作は、「はい。」とおじぎをして頭をあげると自分の影

がサツと地面にうつりました。興作はまるで自分の體が歸つてきた様に、

「ヤア影法師うれしいらしい。」

と、踊つてみたり、はねてみたり、大喜びで歸つて行きました。

二二、驢馬の數

久吉さんのお家には澤山な驢馬が飼つてありました。

お天氣の好い或日曜日朝早く、十匹の驢馬を連れて野原へ参りました。

野原には柔かい草が一面に生えて居ます。久吉さんは日向ぼつこをしながら、嬉しうに草を食べる驢馬の番をして居ます。

驢馬はお友達同志鬼事をしたり、お歌を謠つたり、又起きたりねたりして遊びました。

其内日が暮れかゝりましたので、久吉さんは皆を集め、自分は一匹の驢馬に乗つてお

家へ歸りました。そして途中で驢馬の數を數へて見ました。

「一匹二匹三匹四匹……………」

ところが何うしたものか一匹足りません。

吃驚した久吉さんは驢馬から下りて數へ直しました。

「まあ。よかつた、よかつた。失くなつては大變だ。」

と言つて驢馬に乗りました。けれども矢張心配になるので、

「いや待てよ。念の爲にもう一度數へて見やう。一匹二匹三匹四匹五匹六匹七匹八

匹九匹…………、あら又一匹足りなくなつた。」

と、青くなつて驢馬から下りて、又數へ直しました。さうすると矢張ちやんと十四居ります。

久吉さんは安心して驢馬に乗ると、

「もう一度ためしに數へて見やう。」

と、言つて調べますと、又九匹しか居りません。不思議で不思議で堪りません、そして何だか急に恐怖くなり出しました。

で、驢馬を其處に捨てたまゝ、駈けて歸りました。そしてお家の側の小川で鉄を洗つて居たお父様を見付けましたから、矢庭に、

「お父さん、お父さん。」

と、お父様の手を引きました。お父様は吃驚して振り返ると、久吉さんです。

「何うしたのお前は、何處か悪るいのぢやないか、顔色がわるいが。」

「いゝえ、お父様、驢馬が大變です。」

「驢馬が何うした？」

「驢馬のおばけです。」

「驢馬のおばけ？」

「え、九匹になつたり、十匹になつたりして。」

お父様は何の事だか一寸も分りません。けれども久吉さんが息をはづませて、ピクピク震ひながらお父様の手を堅く握つて居るものですから、お父様も心配になつて來ました。

「其おばけの驢馬は何處へ行つた？」

「アア、彼方に居ます。」

「よし。わしが捕へてやらう、久吉行けつ。」

久吉さんとお父さんとは駆け出しました。すると先刻の驢馬は久吉さんを失つて歸る道が分らず、道傍でうろくして居ましたが、久吉さんのお父様の顔を見ると、嬉しさに皆走り寄つて來ました。

「久吉、おばけの驢馬は何處へ行つた？」

「茲に居ます。」

「何處に？」

「それ其處に。」

四邊を見廻しますが、おばけの驢馬は見えません。

「何も居ないぢやないか。」

「でもお父さん、九匹になつたり十匹になつたりするんですもの」

「どれ、お父さんが數へて見やう。一匹二匹三匹四匹五匹六匹七匹八匹九匹十匹、居るぢやないか久吉。」

久吉さんは不思議ですから、今度は自分で數へて見ました。すると矢張十匹居ました。

ので大安心致しました。

二二、傘屋のをぢさん

此頃は梅雨で傘がよく賣れるのでなか〜忙しい。をぢさんは毎朝早く起きて、傘を張つたり徽號を書いたり一生懸命です。

處が折角門へ乾しておいた傘が、ヒヨツとすると誰かい持ち逃げでもすれば大變だと思ふのと、風が吹いて來るとトン〜と音を立て、他所の方へ飛んで行くので、をぢさんは落付いて仕事をして居られません。

其の中にもトン〜と傘の飛んで行く音が聞えるので、をぢさんは幾度も門へ出てみねばなりません。之は困つた事だ、何かよい工夫をといろ〜考へた末、お〜よい事を思ひ付いたと、ボンと手をたいて大急ぎで奥へはいつて、押込の中から幾筋かの細緒を取り出し、にこ〜ししながら表へ出かけていつて、乾してある傘の柄の一



本一本に、其細緒をくゝりつけ、さて此の端を何所に、一寸小首をかたむけました
が、ちぎりに此所がよい之れが一番安心だと獨言して、どれもこれも皆自分の腰にしつ
かりと結び付けました。

をしてちやんと仕事場に座つて、さも感心したやうに、おれはどうしてこんな賢い
だらう、こんなよい智慧は誰も出ないだらう、ほんこによい事を考へたなあ、さあ仕
事にかゝらうと、又傘を張りかけました。

すると少し風が出たなと思ふと門に乾してある傘が、トン／＼と音がすると一緒
に、をぢさんの腰のあたりが、少しふわ／＼と上に下に右に左に動くやうですので、
をぢさんは之はをかしいと、ちつと自分の腰のあたりを見まはして居ると、元の通り
に落付きました。

ふゝん何の事だ、此腰をうんとするて居ると、誰があれを持つて行かうとしても離れ
るものか、風が吹いてもトン／＼と飛んで行けるものかと、大威張りで仕事をして居
ますと、今度は大分きつい風が吹くと、をぢさんの腰も大分強くゆら／＼と動きます。

其の都度(つぎ)をぢさんは何(なに)くそつーといつて、うんと力(ちから)を入れて座(す)つて居(ゐ)ますうち、ピユ
ーと風の音(ね)が聞(き)えたと思(おも)ふと、をぢさんの腰(こし)もふわあ〜と、畳(たたみ)を離(はな)れました。何(なん)の
と力(ちから)を入れやうと思(おも)ふひまもなく、果(は)てはをぢさんの身(からだ)體(たい)はする〜と門(かど)の方(ほう)へ引(ひ)張(は)つ
つて行(い)かれるので、これ〜誰(たれ)だ、いたづらをするのはと、半(はん)分(ぶん)どなつて居(ゐ)るうちに、
ふと上(うへ)の方(ほう)を見ると、白(しろ)い傘(かさ)や花(はな)模(も)樣(やう)のある傘(かさ)や、いろ〜な傘(かさ)がすつと上(うへ)へあがつ
て行(い)きます。

をぢさんはハツと思(おも)つて腰(こし)の緒(を)を解(と)く事(こと)も忘(わす)れて、しつかり傘(かさ)の柄(え)に付(つ)けてある細(ほ)緒(を)
を握(にぎ)りました。傘(かさ)はピユピユといふ風(かぜ)の音(ね)につれて、をぢさんを宙(ちゆう)釣(づ)りにしたま
ま上(うへ)へ上(うへ)へと上(あ)つて行(い)きます。をぢさんは緒(を)につかまりながら、あれ〜誰(たれ)か助(たす)けて
おくれ、お助(たす)けお助(たす)けと聲(こゑ)を限(かぎ)りに呼(よ)ばはつて、足(あし)をピン〜させて居(ゐ)ますうち、下(した)
の屋(や)根(ね)も何(なん)も小(ちひ)さくしまひにはよく見(み)えませぬ。眼(め)もまはつてきます、氣(き)も遠(とほ)くなつ
てしまひました。其(その)中(ちゆう)ふと氣(き)がついて身(からだ)體(たい)がどこかに落(お)付(つ)いた様(やう)なので、そつと眼(め)を
あけて見(み)ますと、さあ大(たい)變(へん)まあ驚(おどろ)いた、自(じ)分(ぶん)のついで向(むか)ふの方(ほう)に書(か)でみたやうな角(つの)が、

二本(にほん)ニユツとはえてみる〜恐(こは)い顔(かほ)した雷(かみなり)さんが、此(こ)方(ち)をねめつけて居(ゐ)ます。
をぢさんはハツと思(おも)ふと身(からだ)體(たい)が、ぶる〜ふるへて來(き)ます。思(おも)はず首(くび)をすくめて、へ
いとお辭(じ)儀(ぎ)をしますと、雷(かみなり)さんは底(そこ)力(ちから)の強(つよ)い聲(こゑ)で、一(たい)體(たい)貴(き)様(さま)は何(なん)者(もの)だつ。見(み)ればいろ
〜な傘(かさ)の柄(え)の細(ほ)緒(を)を腰(こし)にまきつけて。はい、私(わたし)は傘(かさ)屋(や)のおやぢでございませぬ、どう
ぞ〜生(いのち)命(めい)だけはお助(たす)けを。いや、別(べつ)に生(いのち)命(めい)を取(と)らうとも何(なん)とも言(い)はぬが、何(なん)用(よう)あつ
てこんな雲(くも)の上(うへ)まで來(き)たのだ。はい、實(じつ)はかやう〜なわけで、自(じ)分(ぶん)の賢(かしこ)い事(こと)や智(ち)慧(ゑ)
のあるのを、威(か)張(は)つて居(ゐ)りますうち、どう〜參(まゐ)りましたもの、今(いま)頃(ころ)は内(うち)の者(もの)や近(きん)
所(じよ)の人(ひと)達(たち)が、私(わたし)が天(てん)上(じやう)して居(ゐ)なくなつたので、大(おほ)さはぎをして居(ゐ)る事(こと)と思(おも)ひます。ど
うかお慈(じ)悲(ひ)に私(わたし)をおかへし下(くだ)さいまし、御(おん)願(ねが)ひ申(まう)しあげますと、幾(いく)度(ど)も頭(あたま)を下(さ)げて涙(なみだ)
がら頼(たの)みますので、雷(かみなり)さんも流(なが)石(いし)に氣(き)の毒(どく)に思(おも)ひましたか、よしそんなら御(おん)家(け)へかへ
してやる、けれどもこゝは雲(くも)の上(うへ)だし貴(き)様(さま)の家(うち)はずつと下(した)の地(ぢ)面(めん)にあるから、飛(と)び下(か)
りるといふわけにもゆかぬ。はてなど、雷(かみなり)さんもしばらく考(かん)へて居(ゐ)りましたが、うん
よい事(こと)を考(かん)へついたから、貴(き)様(さま)はしばらくと眼(め)をつぶつて居(ゐ)れ。をぢさんは、「は

い。「といつて眼をつぶるかつぶらぬうちに、ピカッと光つてゴロ／＼となり出しました。

をぢさんは常から至つて雷鳴はさらひです。やあと言ふなり眼をつぶつて、おへそをおさへて、ベチャとうつむいてしまひました。ザア／＼と大雨が降つて、ピカピカと光るわ、耳もつんざくばかりの雷鳴が、グワラ、グワラ／＼をおさんは生きた心地もしません。耳もおさへねばならず、眼もつぶらねばならず、又おへそも氣になります。

しばらくして雷鳴もやみ、雨もいつしか降らなくなつて静なものですから、こは／＼そつと眼をわけて見ますと、之はまた何といふ美しさでせう。青々した空から赤や紫や黄や緑の交つた、きれいなきれいな虹の橋が。

お、私はあの橋から、かへしてもらつたのだ。そしておぢさんは元の傘屋の自分のお家の前に、皆からやかましく言つて迎へられて居ました。

二三、七兵衛さんの釣鐘つり。

昔江戸に七兵衛さんと言ふ人がありました。大層賢い人で、

「七兵衛さんは賢い人だ。」と江戸中の人が讃めて居ました。

或時お寺の大きな釣鐘が、ゴーン、といつて、雷さんが落ちた様な、大變大きな音がして、お堂の上から地面の上に落ちました。そこでお寺の坊さんは大變吃驚して「エライ事になつた、もう今日からお鐘を撞く事が出来ん。お鐘がならないと皆の人が朝起きる時も、お晝の御飯を頂く時も、晩に寝る時も分らないから、大勢の人が困るであらう。」

と、早速手傳さんや、大工さん等を大勢呼んで来て、此お鐘を元の通りにお堂の上へ上げて下さいと頼みましたが、手傳さんも大工さんも、

「こんな大きな釣鐘はなかく、澤山の人でなければ、上ることは出来ません、其上に澤山のお金を頂かないと、請負する事は出来ませす、それに一月も二月もか

「かりませう。」

この事でありましたので、坊さんは大變に困りまして、一つ賢い七兵衛さんに考へて貰つたら、又よい智恵が出るかも知れませんかと思つて、七兵衛さんと呼んで來ました。七兵衛さんは其お話を坊さんから聞いて、

「それは何でもない事です、お金も少しあれば出來ます、明日のお晝までにお鐘を釣り上げませう。」

と言ひました。坊さんは喜んで、

「それは本統の事でありませうか。」と言ひますと、

七兵衛さんは、

「私は嘘を言つた事はありませぬ。」と言ひますので、坊さんは、

「それでは明日御願ひ致します。」と頼みました。

七兵衛さんは直に近所のお米屋さんの處へ行きまして、

「明日俵にお米を澤山入れて、お寺のお鐘の下迄持つて來て下さい。」

と頼みまして、其翌る日、七兵衛さんは手傳さんに、大きな繩をもたせてお寺に行きますと、お寺の坊さんも、大勢の人も、賢い七兵衛さんがあの大きな落ちた釣鐘を釣る相な、どんなにして釣るのか見に行けど、大勢ワイワイ見物に參ります。

七兵衛さんはお鐘の上の方に繩をくくり、お堂の上にかけて、下に長く引張りました。それから七兵衛さんは、大きな聲で大勢の人に、

「皆さんお鐘が落ちて難儀をして居ますから、お寺の供養の爲に、此繩を引いて下さい。」

と頼みますと、大勢の人は私も私もと、繩の足らぬ程大勢が一時に聲を揃へて、

「ヨイヤ。ヨイヤ。」

と力を入れて引きましたので、釣鐘は少し上りました。さうすると七兵衛さんはお米屋から持つて來たお米を、お鐘の下に入れますと、お鐘は少し上ります。

「もう一度引いて下さい。」

といふので、大勢が又繩を引きますと、又少し上ります。すると七兵衛さんは、又お米をお鐘の下に積み上げます。此の様にして段々お鐘を上げては、お米を積み上げて行きますので、お鐘はとうとうお堂の上になりました。

七兵衛さんはお堂の上に釣鐘をかけまして、下のお米俵を取つて終ひますと、お鐘は元の通りお堂の上に釣れました。

坊さんは大層喜んで、早速お鐘を、ゴーンと撞きますと皆の人が口々に

「七兵衛さんのおかげで、お鐘が鳴る様になつて、朝起きる時も、お晝の御飯の時も晩寝る時も知れる様になつた。七兵衛さんは賢い人だ。」

と皆が手を叩いて讃めました。

今澤山の大船小船の通うてゐる安治川も、此七兵衛さんが考へて、掘つたのです。

二四、帽子屋さんとお猿

或町の帽子屋さんが、可愛氣な夏帽子を澤山造つて置きましたが、だん／＼暑くなつて来たから、町の子供らは大概買つて呉れました。

田舎の子供も、矢張同じやうに欲がつて居るであらうから、高い山を越えて向ふの村へ賣りに行かうと思つて、大きな籠を二つ出して、一つには男兒の帽子を十個入れ、一つには女兒の帽子を十個入れ、それを棒に荷うて、自分も帽子を被つて賣りに行きました。其途中暑いのに、

「ヨイショ、ヨイショ」

と山を登つたので、汗びつしよりになつて、大層疲れましたから、「ヤレヤレ」と大きな松の木蔭にもたれ、根元に腰をかけて休みました。

すると、何處からか涼しい風が吹いて来て、よい氣持になつたので、ついフラリフラリと眠つてゐましたが、早グダグダと大きないびきの聲が、山の奥まで聞えたので、

猿の御父様がびつくりして、高い木から下りて見ますと、人が帽子を被つて、フラリフラリと眠つてゐるので、大層面白から自分も真似をして見たいと思つて、其傍を見るとき帽子が籠に二杯ありますので大いに喜び、一つ出して被り、フラリフラリと真似をしてゐました。

そこへ子猿が五匹づれで、お父様を捜しに来て見ると、人間のやうに帽子を被つて、フラリフラリと、眠つてゐるのが、おかしくておかしくてたまりませんから、銘々一つ宛出して被り、山に歸り、お母様に見せましたら、おかあさんは、大へん不思議がつて、どうぞ私も私もとお母様や澤山なお友達までもついて来て、皆々帽子を被り大喜びで、フラリフラリと真似をしてゐましたが、間もなく、御父様が先に立つて、前の高い木に登つたので、後から皆續いて登り、木の上で「キツキツキツ」と、踊つてゐました。

暫くすると、帽子屋さんは目が醒めて大びつくり、

「サー大變だ、眠つた間に、誰か帽子を皆持つて行つたどうしやうか。」

と、大層心配してゐましたが、何だか上の方で「キツキツキツ」と、お猿の笑ひ聲がしますから、仰向いて見ると、尾の長い猿や、手の長い猿が親猿も子猿も皆、赤い顔して帽子を被り、木の枝から枝へ、渡つてゐるので、

「おやまあ、帽子は猿が皆取つて行つたのだね、私が悪かつた、どうしたらよいか早く返して貰はう。」

と、お出でお出でをすると、やはり猿もおいでをおいでをする。帽子を持つて振り廻すと、猿も同じやうに真似をしますので、不圖思ひ付いて、今度は帽子を地面に投げて見ました、すると皆真似をして、帽子を投げたのでそれを拾うて、一つ二つ三つ四つ……と數へて見ましたら、一つも足らぬことなく、元の數だけ揃ひました。それを籠に入れて大急ぎで山を下り、向ふの村へ行つて見ると、元氣な子供が澤山集つて、仲よく遊んでゐますから、猿が帽子を被つた話をして、

「帽子を安く賣るから、お母さんにさう云つて来て頂戴。」といひましたら、子供等は家に歸り、其事を話しました。

すると多勢のお母様達が、私も私もと帽子を買つて下さつたから、皆買れましたのでお金を儲けて大喜び、今度は駆走で山を越えて歸りました。

二五、走るもの同志

汽車と、電車と、自動車と、自轉車と、お馬との走るもの同志が速い自慢をして、汽車「僕は世界中で一番足が速いよ、僕が走り出したら、誰だつて叶ふことはない、東京まででも一夜のうちに行くよ。」

電車「汽車君より僕の方が速いぞ、京都まで位、一日に何度でも往復するよ。」

自動車「僕だつて負けるものか、僕がブツ／＼いひ出したら、誰だつて叶はないよ。」

自轉車「僕は此の間鳴尾の競走で一等賞をとつたよ。」

お馬「僕は昔から千里を走ると誰でもいふよ。」

いか、競走をして見やうではないかといふ相談が出来て、いよ／＼明日は大阪練兵場から、神戸まで競走することになりました。

さあ、さうなると大評判、新聞の號外が出るやら、練兵場には旗や提灯のたこつりが出来るやら、大騒ぎ、愈々其日になると、朝から汽車も、電車も、自動車も、自轉車も、花や旗で飾り立て、

「ブウ／＼／＼／＼」と、練兵場へ練り込みます。お馬も鬘をきれいに梳いて、身もきれいに洗つて、立派な立派な手綱をつけて、御飯もどつさり食べて、「ヒン／＼」と、勇ましく練兵場へまゐります。

さあ愈々競争になつて、すらすらと並んで「用意」でチヤンと走るこしらへをして、今「ドン」といふのを待つて居りました。

見物人はどれが勝つだらうと思つて、皆手を握つて一生懸命に見てゐます。「ドン」と一發にて皆が走り出しました。

「ピーシュツ／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

「チン~~~~」

「ブツ~~~~」

「ブウ~~~~」

「バカ~~~~」

せれもくく一生懸命に走りました。さあせれが勝つでせう。大分行きました時、汽車は、汽鐘に一ぱい水を入れて来ることを忘れて、水がなくなつたから、動かなくなりました。

電車はあまり無茶苦茶に走つて用心をしなかつたから、脱線してしまひました。

自動車は車のどむをよく調べて置かなかつたから、途中でパンクしてしまひました。

自転車は向ふ見ずに走つて、自転車とすれすれになつて自転車の輪でとばされて、くだけてしまひました。

お馬だけは一生懸命によく道に氣をつけて、いつも同じ調子にバカ~~~~と走りましたから、とうとう第一等に神戸に着きました。

お馬が一等賞だといふので、みんなが萬歳々々といつて褒めました。

獸仲間でもみんなが集つて来て「おめでたう~~~~」と、いつて喜びました。お馬のお家では、お父さん馬も、お母さん馬も大喜びで、一つお祝ひをしやうといふので、大勢の獸仲間を招んで、御馳走をすることにになりました。

大きいのも、小さいのも、皆連れだつておよばれにまゐりましたら、お父さん馬から

「今日は皆様の一番好きな御馳走をしますから、何なりと仰しやつて下さい、まあ一番大きい象さんからさ、まず、何にいたしませう。」

「~~~~」

次は虎さん「~~~~」

犬さん「~~~~」

狐さん「~~~~」

鼠さん「~~~~」

猿さん「~~~~」

猫さん「~~~~」

兎さん「~~~~」

皆さんのいふやうな好きなく御馳走して、頂いて、歌つたり踊つたりして、面白く

お暇をいたしました。

二六、良夫さんのお歌

うららかな小春日和の、打續く頃或片田舎に良夫さんはお母様と唯二人、淋しく淋しく住んで居ました。

良夫さんは、唯一人のお母様を大事に、お母様も又良夫さん一人を頼りに、暮して居ました、良夫さんは毎日幼稚園から歸りますと、先生からお習ひしたお唱歌やお話をして、お母様をなぐさめて居ました。良夫さんはお歌を歌ふのが一番好きでした。又大へんお上手でした。

良夫さんのお家は貧乏でしたので、お母様が毎日々々他家のお手傳をして、お金儲をして生活して居りました所がお母様がふと御病氣になりました、床につく様になりましたので、益々貧乏になつて参りました、可愛さうに良夫さんは、小さい胸を痛めて

色々考へましたが、どうも仕方がありませんでした。

或夕方良夫さんは何時もの様に、お医者様へお薬取りに行きました。歸る途中大きな池のある所で参りました。丁度牙え渡つた十五夜のお月様が、向ふの小山の上におぼろりになつたばかりで、静かな水の面に、真圓と繪のやうに映つて實によい景色でした。良夫さんは思はず立ち止つて見惚れて居ましたが、ふと手に持つてゐたお薬瓶を草の上に置きまして、座りました。

そして、鏡のやうに清く澄み渡つたお月様を仰ぎ見て、

「お月様！、お月様！、どうぞ僕の大事な大事なお母様の御病氣が、早く治りますやうに、元の丈夫な身體になりますやうに。」

と、一生懸命にお月様にお願ひ致しました。さうして美しい良い聲で、うさぎうさぎ何を見てはねる

十五夜お月様見てはねる。

つけつけ團子まるめる團子

團子でできたら投げてやわらう。

と、昨日幼稚園で教へていただいた、お唱歌をうたひました。すると何處からともなく白髪のお爺さんが、現はれました。

「お前は太へんお歌が上手だね、お爺さんに、もう一遍歌つて聞かせて呉れないか。」と申しました。

良夫さんは大好きなお歌の事ですから、喜んで、「うさきうさき」と歌ひ始めました。

お爺さんは、感心して聞いてゐましたが、御褒美にふところから、一つの紙包を出して下さいました。良夫さんは大いに喜んで、お禮を申して、お爺さんを仰ぎ見ました。然し不思議にもお爺さんの姿は何時の間にか消えてありませんでした。

良夫さんはお家へ歸りまして、お母様にこのお話をいたしました。頂いた紙包みを差出しました。中には未だ見たこともない、お美味さうなお菓子が入つてゐました、それから二三日過ぎると、不思議にもお母様の御病氣はだん／＼快くなつて参りました。良夫さんは大層喜んで

「こんなに早くお母様の快くなられましたのは、あのお菓子を頂いてかしら、神様か知ら。知りたいものだ」

と、しばしお菓子の主に憶れて居ました。ふと思ひついて、

「お月様は、あの御空で見えていらつしやる事だらう。きつと御存じにちがひない。」と思ひました。

それから毎日々々

「どうかしてお月様の處へ行つて聞きたいものだ、どうかして行かれないだらうかしら、獨り考へに耽つて居ました。折柄ここからともなく實に心地よい樂の音を耳にしました。

良夫さんはしばらく、うつとりと聞き惚れて居りましたが、何時とはなく、樂の音に近づきました。

あたりを見渡しても、一向何物も見當りません。

お月様は昨日に劣らぬ、美しいお顔をして下を、見下ろしていらつしやいます。

良夫さんは、夢かそばかりぼんやり立つてゐますと、向ふから樂の音に合せて何物か飛びながら、近よるものがあります。それは良夫さんの憶れて居たお月様の家臣の兔でありました。

良夫さんの喜び様、たどふるに物がありません、

「兔さん、よく来て下さいました、私に何か御用でもあるのですか、私もあなたにお伺ひしたいことがあるのです。」

兔は、

「私は今日お月様のお使ひで参りました、お月様が是非良夫さんに、月のお宮にお遊びに来て頂くやうに、さうしてあのお上手なお歌を、聞かせて下さいとの事です。」と申しました。

良夫さんは、かねてより望んで居た所なので大喜びで承知いたしました。

「嬉しいな、嬉しいな、でもどんなに行きませう。」

「私は兔でも、御用のある時はお月様に頂いてある、美しい羽根を附けます、どう

ぞ御心配なく私の背中にお乗り下さい。」

良夫さんは喜んで、すぐに乗りました。

見る見る中に、お家も、お庭も、木も、大きなお池も、小山もだん／＼小さく見えなくなりました。キラ／＼と光つて居た御星様も、今は横の方にあります、良夫さんは珍らしいものですから、彼方此方と眺めてゐましたが、何時の間にか、月のお宮の、美しい花園の真中に立つてゐました。

空には良夫さんの、今迄に見たことのない美しい花が、ブンブンと、よい匂をさせてゐます。

小鳥はよい聲で啼いてゐます。良夫さんの心も、うき／＼してまゐりました、蝶々や蜻蛉は、得意なダンスをして遊んでゐます、やがて澤山の兔に案内されて、美しい御座敷へ通されました。

あまりに綺麗なので、喫驚して見惚れて居りましたが、やがて、

「お月様、先達つてお菓子をいただきましたのは、お月様ではございませんでせう

か、お蔭でお母様の御病氣が治りまして、こんな嬉しい事はありません。」
と、御禮を申しました。お月さまは

「まあ良夫さんよく来ましたね、どうぞ御ゆつくりと遊んでいらつしやい。」
と、申されました。大變お喜びになつて色々珍らしい御馳走をして下さいました。お星様のダンスや、雨の神様風の神様などの珍らしいお唱歌をさかせていただきました。良夫さんも、御禮に力限りの良い聲で、幼稚園でお習ひしました。お唱歌をうたひました。

お月様や、家臣の方々より大變ほめていただきました。

お月様は、御褒美として、美しい立派な飛行機を良夫さんに下さいました。良夫さんは大喜びで、

「お月様どうもありがとうございます、早速これにのつてかへりませう、あまりおそくなりますとお母様が御心配になりますから。」
と、云つて皆にお暇乞ひしました、月のお宮を後にプロペラの音勇ましく御家をさし

て、出發しました。

良夫さんは始めて、飛行機にのつたものですから、一生懸命に、ハンドルを取つてゐましたが、不圖機械に故障が出来て、お家の前へ落ちました。

ふつと目をさまして、あたりを見ると窓から美しい朝日がキラ／＼と輝いてゐました。

二七、正雄さんと妙子さん

或所に正雄さんと妙子さんといふ仲の好い兄さんと、妹さんが御座いました。此の二人の子供は大層お父さんや、お母さんの言ひ付けをよくきく、優しい可愛らしいよい子供で御座いました。

或時お母さんはどうした事か、ふと御病氣におなりなさいました。

正雄さんと妙子さんは大變心配して、毎日幼稚園から歸ると、直ぐにお母さんのお側に行つて、お足をさすつたり、お薬をさし上げたりして、

「お母さん早く快くなつて下さいませ。お母さんが御病氣ですと、私等は淋しくつてなりません。」

といつて、毎日、介抱して居りました。

お母様は大層お喜びなされて、

「お前等がそんなに優しく言つて呉れますから、ほんたうに嬉しいですよ。少しでも早く快くなつて、皆で、山遊びにでも、行きたいと思つて居ります。」

と仰しやいました。

正雄さんと妙子さんは、どうしたらお母様の御病氣が早く治るだらうと、二人で居りましたが、どうもよい考も出ませんでした、暫らくして妙子さんは、ふと思ひ付きました。

「お母さん、御病氣の時は何か好きなものをお上りなさると、早く快くおなりなさるかも知れません。何か好きなものは御座いませんか。」

と云ひました。するとお母さんは、嬉しうな顔で、

「よく言つて呉れました。私は去年お前達と一緒に畠に取りに行つた様な毒を食べたら、病氣が直ぐに快くなるかと思ひますけれども、こんなに寒くつて、雪が澤山降つてゐては、逆も毒は無いから仕方がありません。」と仰いました。

側で聞いてゐた正雄さんは、

「お母さん、それでは私妙子さんと二人で、何處かへ行つて、毒を探して参りますから暫らく待つてゐて下さいませ。」と言ひますと、

お母さんはニッコとお笑ひなされて、

「それは有難いけれども、毒は暖い時でなくてはありませぬよ。」と仰いました。

妙子さんはそれを聞くと、心配相な顔をして、

「でも毒がなくてはお母さんの御病氣が治らないのですもの、私、兄さんと二人で何處かへ行つて探して来ます。」と言つて、直ぐに籠を持って出かけました。

それから正雄さんと妙子さんは、去年お父さんや、お母さんに連れられて行つた畠の

方に行きました。正雄さんと妙子さんは、

「私どうしやう、毒を持つて歸らねば、お母様の御病氣が治らないのだから。」

と二人で話をしながら、心配して居りますと、何處からか、

「正雄さん、妙子さん。」

と優しい聲が聴えますから、二人は、

「オヤ!! 誰が私等と呼ぶのでせう。」

と言ひ乍ら、向ふを見ると、眞白な美しいお姿の女神様が、いらつしやいました。

二人は直ぐにお側に行つて、丁寧にお辭儀をして、

「何か、御用で御座いますか。」と申しますと、

女神様は、

「あなた方はそんなに心配なさらなくつてもよろしい。あなた方は、ほんたうにお母さんを大切になさるよい子ですね。毒は今澤山取れる様にして上げますよ。私は此

處の山の神です。私には春の神、夏の神と云ふ二人の息子がありますから、今それ

を呼びますから、一寸お待ちなさい。」と仰いました。

二人は不思議に思つて居りますと、神様は、バツチ〜と、二つお手をお打ちなされ

「春の神、春の神。」

とお呼びになりますと、今迄眞白であつた畠は、俄かにお日様が照つて、大きな〜
毒の木が、ムック〜と畠一ぱいに生えて、それに美しい白い花がポツ〜と澤山咲
きました。

正雄さんと妙子さんは、

「ああ、面白いなあ。」

と言つて見て居りますと、又神様がバツチ〜とお手を二つお打ちなされて、

「夏の神、夏の神。」

とお呼びになりますと、此度は白い花の先に、大きな、赤い、美味相な毒が、ポツチ

くく」と限りなく出来ました。神様はニッコとお笑ひなされて、優しいお聲で、
 「正雄さん、妙子さん、さあ〜」梅が澤山出来ました。早くお取りなさい、お取りなさい。」

と仰せになりました。

正雄さんも妙子さんも、嬉しくて嬉しくて堪りません。

「どうも有難う御座います。」

と御禮を申上げて、直に二人で籠に一ぱい梅を取りましたから、早く歸へつてお母さんに、差上げませうと思つて、二人は顔を上げて見ますと、何時の間にか神様はいらつしやらなくて、又畠には元來の様に、眞白に雪が積つて居りました。妙子さんは、

「ああ、兄さん嬉しいですね。早く歸りませう。」

と言つて仲よしの兄さんと妹は、寒さも忘れて、鳥が飛ぶやうに、急いでお家に歸りそうつと襖を開けて足音のせぬ様にお母さんのお室に入つて、二人は行儀よく、お側

に座つて、

「お母さん梅を持つて歸りました、早くお上りなさいませ。」

と言つて眞赤な、美しい梅の籠をお母さんの前に差し出しますと、お母さんは是を御覽なされて、

「オヤア、此寒いのにな、何處にこんな美味相な美しい梅が澤山ありましたか。」とお尋ねなさいました。

正雄さんと妙子さんは、さつきの神様のお話を、お母様に委しくしました。すると、お母さんは直に起きて、お行儀よくお座りなされて、

「さうでしたか。それはお前方が何時もお父さんや、お母さんの言ひ付けをよく聴くよい子だから、神様がお前達をお助け下さつて、お母さんの病氣を早く治るやうにして下さつたのですよ。これから後も、お父さんやお母さんの言ひ付けをよく聴き、お友達にも親切にして、よい子供におなりなさい。」

それから直に、お母様の御病氣は治つて、妙子さんや、正雄さんは、毎日々々お母さんや、お父様に面白いお話を聞かせて頂いたり、よい所へ連れて行つて頂いたりして、楽しく遊んで、だんく大きくなつて、人に賞められるやうなよい人になりました。

二八、羊の毛ころも

それは、大昔の又其昔の事で御座いました。

或大層お偉い又大變御立派な一人の神様がお出でになりました。

或時の事神様は下界の方を見下して、御覽になりますと、そこは暗闇の何にも無い淋しい仕方のないもので御座いました。

そこで神様はお考へになりました、お日様をお作りになりました。お月様をもお作りになりました。

又海も出来れば山も出来ました。其處には海に棲む、色々の魚もお作りになれば、春

に咲き、秋に紅葉する總ての美しい數知れぬ草木をお作りになりましたが、是だけでは何だか物足らぬと思召して今度は、色々の動物をお作りになりました。折柄時は寒い冬にさしかゝつて参りましたので、それ等の動物に毛衣を作つてやりたいと思召しました。さあ神様は何を一番に呼んで衣を與へやうとなさるでせう。丁度其時濕つた土の上を、如何にも寒さうに匂つて居る小さいく蚯蚓に、お目が止りました。

神様は直に、

「蚯蚓や〜。」

とお呼びになりましたが、何の答もなく其儘逃げました。

次は章魚にお聲があつて、

「章魚や、章魚や」

と仰せになりましたが、何の答もしないで、長い氣味悪い八つの脚を伸べて何處かへ去つてしまひましたので、章魚も又衣を頂く事が出来ませんでした。

其處へ蛇がやつて参りましたので、神様は、

「蛇や、蛇や。」

と繰り返して仰せになりました、蛇は神様の方を見乍ら彼方に去つてしまひました。其處で神様はあゝ何といふ者共であらうと、歎きながら上を仰いで御覽になりますと丁度其時、空をかける鳥にお目が止りました。

早速神様は鳥をお呼びになりますと、鳥はさも嬉し相に雀はチュ〜〜〜鳥はカア〜〜〜と、それぞれその聲を出して飛んで参りましたので、直に艶々とした羽の衣を頂いて、出来るだけ大きく翅を廣げ、楽しい國を目指して、飛んで行きました。中にも孔雀は一番お返事が上手に出来ましたので、彼んなに綺麗な衣を頂く事が出来ました。

次に神様は大變に大きいものを、お見つけになりました。それは見るから猛々しい雄獅子で御座いました。神様は又、

「獅子よ、獅子よ。」

すると邊りに鳴り響くやうな大きな聲を上げて、

「ウオー、ウオー。」

と言つて神様の前に参りまして、うづくまりました。其處で神様が

「お前は此山へ行け。」

とお言ひ付けになると何を思つたか、獅子は其反對の山に一目散に走つて参りました。折角お返辭をして神様のお側迄来たのは、よかつたけれども、しまひのお言付けに背いた爲に、音から上だけより毛衣を頂く事は出来ませんでした。

次に神様は猫を御覽になつて、

「猫よ、猫よ。」

とお呼びになりました。するとニャン〜と云つてお答は致しましたが、鼠を見て後にも振り返る暇もなく、去つてしまひました。

猫はお返事だけは上手に致しましたので、毛を頂きましたが、お側にも来ないで、走つて逃げました爲に、冬になると寒がつて、何時もふるく震ふて居ります。何處までも心の広い神様は、まだ寒くて困つて居るものに衣をやらうとなさいました。すると生々とした緑の草の生え茂つてゐる間を、縫ふやうに流れて小川の水は、紫水晶や珊瑚の様な影をうつして、其音は遠くに近くに、高く低く、強く弱く響いて居る間を、あちらこちら歩いてゐる小羊の群が、真に楽し相に親子兄弟で仲ようして居りました。

神様はそれを御覧になつて、

「羊よ、羊よ。」

と仰せになりますと、羊共は一匹も残らずみんな返辭をして、神様の方へ参りました。神様は其しどやかで、従順な羊共の心を御覧になつて、

「お前達はおとなしい者共じや。」

と云つて一番長い毛衣をおやりになりました。

神様からそんな結構な毛衣を頂いた羊共は、寒さも知らずに、楽し相にして居りますと、或日のこと遙か向ふの方にまだ見た事のない形をした、二つのものを見付けました。羊共は

「ああ、不思議な事がある、一體向ふに見えて居るあれは何であらう。私共は四本の足を持つてゐるのに、あれは二本の足で、體には薄絹一つ被つて居ない。」

と言ひつゝ、進んで行つても少しも氣が付かないで、顔に手を當てて、さめくくと泣いて居りました。

そこで羊は、

「一體あなた方は、誰で御座いますか。」といふと、

二人の者は、

「私共は何をかくしませう。アダムとイブと申す者で御座いまして、神様のお言ひ付けに背いた爲に、大變なお叱りを蒙りまして、斯うして食べるものもなければ着物もなく、うろろして居ります。」と答へました。

羊は、

「ああ、それはほんたうに、お氣の毒で御座います。私共は神様のお恵みで、こんな楽しい處で、暖い衣を頂いて、何不足なく暮して居ります。」

どいつて自分達の毛で、暖い布を作る事を教へてやりました。其布は丁度今のフランネルやラシヤの様なものでございます。

アダムとイブは其布が如何にも軟くて暖くて氣持ちが良いので、大變喜んで、羊の好きな紙をお禮にやりました。羊は又それを貰つて、喜んで分けて食べました。

そこで羊の肉は皆さんの知つて居る通り丁度紙にはがれるので御座います。

二九、悪太郎の夢

或所に悪太郎さんといふ、それはくわるい子供がありました。

丁度昨日今日のやうに雨がしとしと降つてゐます日に、お庭の草むらの中から一疋

の蛙がビヨン／＼と飛んで出ました。

すると大きな／＼真黒の猫がこれを見つけて、すぐ蛙を押へつけてしまひました。

蛙は苦しくて、キュツ／＼と鳴いてゐますと、そこへ犬が蛙を助けやうと思つて駆つて來ました。

猫は犬に來られてはたまりません、びつくりして逃げてしまひました。

「蛙はこの時どんなに嬉しかつたでせう。

すぐと犬の前へ行つて兩手をついてお禮をいひました。どんなに言つたでせうか。……

そこへわるさの悪太郎さんが長い棒を持つて來て、いきなり犬を擲きましたので、犬はクワン／＼と大きな聲でくやしさをうになりました。

すると蛙は悪太郎さんのお顔へ飛びつきました。

一疋二疋三疋四疋幾つとも知れぬ澤山の蛙が悪太郎さんの、顔やら頭や首筋やらへ飛びつきました。

悪太郎さんはびつくり仰天してもがいてゐる間に、犬は逃げ出しますと蛙は悪太郎さんの帽子に犬を乗せて、悪太郎さんの棒を握にしてお池の向ふへいつてしまひました。悪太郎さんは苦しくてたまりませんので、目をむきましたらこれは夢でした。

三〇、兎の餌

春の女神様が、東風といふ風に言ひつけて、野山を吹いてまはらせられました。それで野山の草や木がよく芽をふいたかどうかと或日自分で見廻りに出られました。するとどうしたのですか、あちらの木やこちらの木の芽が亂暴にもむしりつてありました。

「やあこれは怪しからん、とこの悪戯者の所爲だらう。憎いことをする者だ。」と、小言を云つておいでになりますと、そこへ可愛らしい山の神様のお子さんがお出になりまして、

「お母さんそれは兎がしたのですよ。」
 「なに兎があれは、あんな優しい顔をしてこんな悪いことをするのか。よろしい今度見つけたら捉へて、よく言ひきかせてやりませう。」
 ところが、お母さん駄目ですよ。この間も僕が見つけたから捉へてやらうと思ふとあれは足が速いものですから、すぐ何所かへ飛んでいつてしまひました。
 「いやいくら足が速くても、私に會つてはかなはんはずだ。」
 と、こんな話をしていらつしやいました。
 此時兎はまだ自分の穴にゐましたが、耳が長いものですから遠くの事もよく聞えて此話がいみなわかりました。そこで兎は心配でくたまりません。

「ああそれは私が悪かつた、せつかく出した草や木の芽を私が食べてしまつたのだ。全く此方が悪いのに相違ない。ついおいしいもんだからみんな食べてしまつたのだ。ああどうしたらよいか知らん。」
 と、獨言を言つて居りますと、早くも又此聲を山の神様のお子さんが聞きつけて、直

ぐと穴へ飛んで来て、

「や、此處にゐるく、兎が此處に居ましたよ。」

と、春の女神様に知らされました。

かうなつてはもう仕方ありません。兎は長い兩耳をたらし短い前脚をつつて、おづ／＼穴から出て、

「どうも相濟まんことをいたしました。」

と、春の女神様の前にさも恐れ入つてあやまりました。すると春の女神様もさすがに可愛さうになりました、

「さうおとなしくあやまるなら今度ばかりは許してあげるが、其かはりこれからはあんな悪戯をしてはいけませんよ。」

と、やさしく言つて聞かされました。

「はい畏りました、もう決していたしません。」

「お前ばかりか、他の仲間にもよくいつておくのだよ。」

「承知いたしました。」

「お前は耳が長いだけに、すぐ云ふことを聞いてくれました、それで私も安心しました。」

と、春の女神様はさも満足したやうに、其まへ行つておしまひになりました。

その後で山の神様のお子さんは、そつと木の蔭にかくれて兎の様子を見てゐられました。

それは、今あんなに言つても、春の女神様がゐられなくなつて誰も見てゐないと思つたら、又きつと芽を食ふだらうと思はれたからです。

ところが兎はせつかく穴を出しましたが、何所へも餌をさがしに行かず、たいぼんやり考へ込んでをります。

山の神のお子さんは、まだ隠れてゐますと、兎はまた獨言を言ひ出しました。

「さあ今日はどうしやう、あまりおいしい芽を食べたものだから、今日から食べ物に困つたな。今までおいしい物を食べたから、今日中はその罰に何も食べずにゐて

見よう、さうしたらひもじくなつて、今度はどんなおいしいものでも、食べられるやうになるだらう。

と、すこく穴の中へ歸つて行きました。山の神様のお子さんは大そう感心して、

「兎さん、兎さん、お前はほんたうにえらくなつたね、ぢやあ私とその御褒美に今日よい物をあげるよ。」

と、言つて自分の持つて居るいちごを半分わけてやりました。

此様子を遠くから見てゐられた春の女神様は、大層この兎の心がけのよいのに感心して、今度は又其御褒美に野山の草や木を茂らせ、それにきれいな花を咲かせられました。

三二、太郎さんの御食事

或所に太郎さんといふ子供がりました。何時も御飯の時に、副食物の小言を云うたり、脇見をしたりするのであちらこちらに、御飯をこぼしたり、お口の邊りや、お手や、膝などを汚して、それはくお行儀悪く食べて居ました。それでお母様は何時も

「太郎や、あなたは何時もそんなに、御飯がお粗末になりますよ。勿體ないではありませんか、そんなにお行儀悪くては、もう御飯がお口に入つて臭れなくなるかも知れませんかよ。今少し氣をつけておあがりなさい。」

と云つて居られました。太郎さんは、何時もはいくど云ふ計りで、なかくお行儀よく頂けませんでした。

或日の事お母様は、

「太郎や、今日は日曜でもありお庭の花も大層綺麗に咲きましたから、あなたの大好きな御馳走をして上げませう。そしてお向ひの次郎さんも、お隣の正夫さんもお呼びませう。」と云はれました。

太郎さんは大喜びで、次郎さんや正夫さんの處に御案内に参りました。そのうちに次郎さんも正夫さんも来られました。そして三人で面白相にお遊びをして居ました。

お母様は朝から大層なお拵へで、姉様もお手傳をして、それはくお鮓が澤山に出来ました。

お母様は其美味相なお鮓を盛つて、お庭の花の下に持つて来られました。

廣いくお庭には、お山もあれば、お池もあり、色々なお花が眞盛りで、それはく美しく御座いました。

三人は此處で御馳走になる事になりました。皆大層喜びましたところが、こちらではお鮓が相談を始めました。

「太郎さんは何時も私達を粗末にして、あちらやこちらにこぼしたり、方々に附けたりして、ちつともお口へ入れて下さいませんか、今は一つ皆で入らぬことにしませうよ。」

と云ひました。

三人はそんな事はちつとも知りませんから、皆喜んで、

「小母さん頂きます。」

「お母様頂きます。」

と、云つて食べ始めました。

次郎さんと、正夫さんとは、さも美味相に食べて居ました。太郎さんも食べやうと致しました。どうしても食べられませんか。お口の側迄持つて来ると、皆ばらくとこぼれてしまひます。幾度食べやうと致しても、食べられません。次郎さんと正夫さんとは、太郎さんが餘りこぼしなるので、不思議な顔をして、見て居られました。太郎さんは何だか悲しうなつて、とうく聲を上げて、ワット泣き出しました。

お母様は何事かと思つて、飛んで来られました。すると太郎さんは、そこら中に御飯をこぼし、お顔や、お手に一ぱいつけて泣いてゐました。そしてお母様に、

「お母様、僕どんなにしても、此お鮓が食べられないのです。」

と云ひました。そこでお母様は、

「あなたは何時もお母様が、お行儀よく御飯をおわがりなさいと云ふのに、ちつとも聞かないから、今日は御飯が怒つたのでせう。それでお口には入らなかつたのでせう。」

と云はれました。太郎さんは成程と思つて、直ぐお詫を致しました。そしてそれから氣をつけて、お行儀よく食べる様になりましたら、お鮓はおいしく、お口の中へ入つて呉れました。

三人は始めて大喜びで頂きました。

三三、誰の足

お天氣の好い日に、大勢の子供が野原へ遊びに行きまして、タンポポや、董や、れんげ等種々のお花を摘んで、居りましたが、餘り長く摘んで居て、疲れましたので、

「一度休みませう。」

と皆で取つたお花を脇に置いて、ずらりと圓くなつて脚を投げ出し乍ら、お話やら、幼稚園で習つたお歌を謠つて居りました。其内に日が暮れかかつて來ましたので皆が

「さあ、歸りませう。」

と云つて起き上らうとしましたが、餘り澤山の脚が、ニョキ〜と轉がつて居るので、どれが誰の脚やら、薩張り分りません。子供達は、

「やあ。大變だ。僕の足はどれだらう。」

「私の足もわからん。どうしやう。」

と皆大騒ぎをやつて、騒ぎました。けれども騒げば騒ぐ程猶更分りませんで、どうと

う、皆がオイ〜泣き出しました。

すると一人のをぢさんが通りかかつて、

「君達は何を泣いて居るのですか。」

と聞いたので、自分等の足がどれだか、分らないので、困つて居る事を話したら、

をぢさんは笑ひ乍ら、

「よし、私が探して上げやう。」

と云つて持つて居た杖で、澤山の足の内の、一つを力任せに撲りますと、

「あゝ、痛い！」

と太郎さんがすつと立ち上りました。それを見て、

「どうです、君の足が分つたのでせう。」

と聞きますと、太郎さんは足をさすり乍ら、

「どうも有難う御座います。」

と御禮をいたしました。すると又杖を振り上げて誰かの足を、一本撲りました。

「あゝ、痛い！」

と赤いリボンを附けた、花ちゃんも立つて、

「私の足があつた！」

と喜んで居りました。をぢさんは次々と、片端から草の上の足を撲りましたので、皆

やつと立ち上る事が出来まして、痛さうに顔をしかめながら、丁寧にをぢさんに御禮をいひました。

三三、太郎の誕生日

太郎さんのお家は、大そう廣うございました。

明日は丁度太郎さんのお誕生日に當りますので、太郎さんの一番好きな動物を招待して、御馳走をするといふ事になりました。

そこで太郎さんは、何時も可愛がつて居る、ポチを動物園のお使ひにやりました。

ポチは猿やら、象やら、熊やら、虎やら、ライオンやら兎やらの所へ行つて、

「明日は太郎さんの御誕生日ですから、お客に来て下さい。」

と、言ひました。皆喜んで、

「明日は屹度参ります。」

と、申しました。

ポチが歸つて来て、この事を話しますと、太郎さんも大層喜んで、お母様や、お姉様や、女中やポチと一緒に、御馳走の用意をして、早く明日が来ればよいのにと、待ち兼ねて居りました。

翌日になると、朝早く起きて、ポチと一緒に外へ出て、誰が一番に來て下さるかと思つて待つて居りますと、

第一番に來たのが、兎のお父さんと子供。その次が猿の兄弟連れ、其後から續いて熊と象とが、ノソノソと歩いて來て、太郎さんのお家が見えて來たといつて、大層喜んで居りますと、其處へ虎とライオンとが遅れてはならぬと急いで參りました。

それを見付けた太郎さんは、喜んでポチと一緒に走つて行つて迎へました。お母さんも迎へに出て、

「まあ、皆さん。ようこそお出で下さいました。さあ。どうぞこちらへ。」と、言つて、奥の廣いお座敷へ通しました。

そこで皆お茶やら、お菓子やらを頂きました。後で赤い御飯に鯛の焼物、西洋料理やら、お芋さんの煮付けやら、人参大根等好きな御馳走をウンとおよばれましたので、皆お腹が大きくなりなりました。

餘りお腹が大きくなつたので、今度はお庭でお遊びませうといつて、皆外へ出て遊ぶ事になりました。

太郎さんは象に載せて貰つて、遊んだり鬼事をしたり、隠れん坊をしたりして居ますと、お猿がお角力をしたいと言ひ出しました。

皆は

「それが宜からう。」

と、言ふのでお角力をする事になりました。

第一番にお猿と兎とがしました。ハツケノコツタノと、兩方一生懸命になつたところ、お猿はお角力が上手なので、兎の足を持つて、ポーンと投げたので、兎はどろろと負けました。

其の次には虎と熊がしました。兩方力が強いものですから、仲々勝負がつきません。そのうちに熊が「エイッ」と、聲をかけて虎を押ししましたので、さすがの虎もヒヨロヒヨロとして、土俵の外に出されました。

一生懸命に見て居たものも、思はず

「萬歳」と、言つて熊を讃めました。

それからライオンと熊がしましたが、矢張熊が勝ちました。

今度は象が誰かとしたと思ひましたが、餘り象は力が強過ぎて誰も相手にするものがありませぬので、仕方なく止めました。

餘りお角力が面白かつたので、知らぬ間に時間が経つて、もう夕方になりました。動物達は太郎さんに御馳走の御禮を言つて、歸らうと致しますと、太郎さんのお母さんが

「一寸待つて下さい。お土産を差し上げますから。」

と、言つて、象には蕨、虎とライオンと熊には牛肉、猿には栗、兎には人參を、それ／＼綺麗な籠に入れて、下さいましたので、皆大喜びで歸りました。

三四、牛と猿と鳩

ある田舎に牛と猿と鳩とが、一本の柿の木の下で仲よく暮して居ました。或日いつものやうに、仲よくお歌をうたつたり、お話をしたりして遊んでゐました處がお猿は、「何と、牛さんも鳩さんも私ら三人は、ほんたうに仲よしで、毎日々々面白く遊んでゐますが、このうちで誰が一番お年が少なくてせう。お年の少ない人は、可愛がつて上げることにはせうではありませぬか。」

と申しますと、牛も鳩も

「然うです、それはよいことです、それではこんなにしませう。」

と言つて、お年の少ないものを定めることにしました。そこで鳩と猿とが牛に、

「あなたの知つてゐる事で一番古いことをいつて御らん。」と言ひますと、牛は、

「さうです、私の子供の時此處は草原で、この柿の木なせはなかつたものです。」と申しました。

次に鳩と牛が猿に同じ事を尋ねますと、猿は、

「私の子供の時に山に遊びに行きましたら、大きな柿の木に柿の實が澤山なつておりましたから、それを一ついただきましたのに、大變おいしかったので、其種子を此處に蒔いておきましたら、生えてこんなに大きい柿の木になつたのです。」と言ひました。

次に又猿と牛とが鳩に尋ねますと、

「私の小さい時、よく兄さんや姉さんと一緒に、この柿の木の枝に止つて休みました。」と申しました。

そこで鳩が一番お年が少ないと云ふことがわかつて、よそへ一所に行く時はいつも、牛の上に猿が乗つて猿の上に鳩が乗つて行つたといふことです。

三五、猿の裁判

或山に猿や兎や山猫や狐等が澤山住んで居ました。

そして其中で一番賢い猿が、お山の王様になつて居りました。

或日の事、大層お天気が好く、ボカ／＼と暖いので、お山の中の獸は喜んで居りました。山猫のニヤン吉とニヤン子も

「今日はお天気が好くて、嬉しいなあ。」

と、言つて、二匹で駆けくらをして仲よく遊んで居りましたが、段々と町の方へ出て行きました、處がさつきから餘り走つたので、お腹が大層空いて來ました。

「アア。お腹が空いた。何か御馳走は無いか知ら」

と彼方此方を見廻はすと、大好きなお肴が落ちてありました。

「マア。嬉しい!!」

と、ニヤン吉が走つて行きました。

ニヤン子も又負けずに走りました。

「アラッ。これは私のですよ。」と引ばると、

「何僕が先きに見つけたんだ」

ど、いつて離しません。

「僕のだ。」

「いや私の物だ。」と言つて引合ひしましたが、どうしても両方が離しません。

「では王様に聞きませう。」

ど、いつて王様の處へ持つて行きました。

「王様、王様、僕が見付けた御馳走なのに、ニヤン子さんが取るので御座います。」

「いいえ、私の物ですのに、ニヤン吉が取らうとするのです。」

お互に負けずに言ひました。王様の猿は、

「ウンヨシ、そんなら、わしが鹽梅よく分けてやらう。」

ど、直ぐに棒で秤を拵へ、棒の真中を持つて、

「どれ其肴をお出し。」

ど、いつて、お美味相なお肴を受取りました。それからお肴を二つに分けて秤の両方

のお皿の上に載せました。すると一方が、ズル、ズルと下りました。

「オヤ、此方がちつと重いね。」

ど、直ぐ重い方のをムシャ、ムシャと噛つて、今度はそれを秤に載せました。

「これでは何うだ。オヤ今度はこちらが少し重くなつたぞ。」と言ひながら、何時迄

も秤を持つて、

「ヤア。こちらが重くなつた。あちらが重いやうだ」

ど、いつて少し宛食べて居ます。ニヤン吉とニヤン子は

「もうお肴を分けて下さるか。下さるか。」

ど、側で見えてゐましたが、大切なお肴が段々小さくなつて、とうとう皆王様の口の中

へ入つてしまつたので

「王様。私等のお肴は何うになりましたか。」

ど、聞きました。すると王様は、

「何、お前達に鹽梅よくわけて遣らうと思つたが、とうとう失くなつてしまつたよ

ハハハハハハ。

ど、笑ひました。

後で二匹は顔を見合せて、

「アア、つまらん事をした。折角美味しい御馳走を食べやうと楽しんで居たのに、ほんたうに惜しい事をした」と、悔みました。

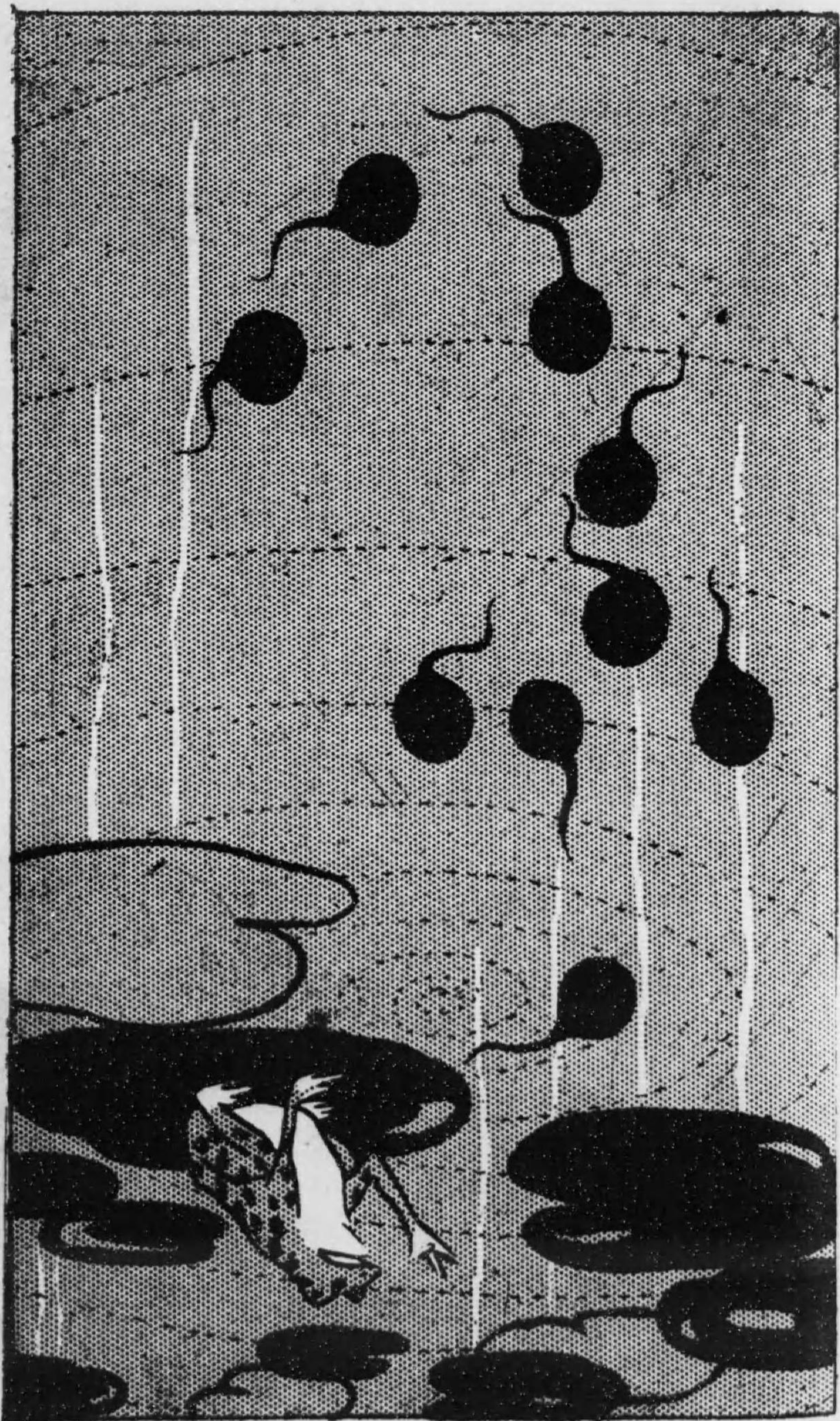
三六、蛙と金魚

或田舎に圓い池が二つ並んでありました。

一つの池には蛙が澤山棲んで居りました。そして朝から晩まで、一寸の事で怒つたり泣いたりして、ガワくくくと、それはく喧しい事でした。

お父さんやお母さんの蛙が、

「仲良く遊ぶのですよ。」



ど、いつて聞かせても、直に喧嘩をしますので、どうしたら仲よくなるだらうと、心配してゐました。

或日一匹の蛙が、ビヨイ〜と陸へ飛び上り、草の上をビヨイ〜と飛んでお隣の池の傍へ行きましました。

すると其池には赤い綺麗な金魚が澤山泳いで居て、大層楽し相に遊んで居ますので、羨ましくなつて、

「金魚さん〜誰も喧嘩をしませんね。」

と、言ひましたら、金魚は、

「はい。皆お父さんやお母さんの言はれる事を、よく聞きますので、何時も元気でニコ〜として仲よく遊んで居ます。」

と、言ひましたので、蛙は感心してお家へ歸つて來ました。そして直に其の事をお話しました。

ところが皆の蛙は見たくなりましたから、連れ立つて、金魚さんの家へ行く事になり

ました。

やゝさんのお玉杓子はまだ足が出来てゐませんので、陸へ上れませんから、お留守番をする事になりました。

大きくなつた蛙は、ガワ／＼と押し合ひなから、金魚さんの池の廻りを、グルツト取りまいて見て居ますと、金魚は何も知らないで、口をアツプ／＼させ乍ら、鬼事をしたり、岩の蔭へ隠れてかくれん坊をして居るものもあります。そして大きな金魚は小さな金魚を大層可愛がつて居ます。風が吹いて木の葉がヒウ／＼と落ちて来ると、
「嬉しい／＼。」と、言つておもちやにして遊んで居ます。餘り面白相なので蛙共は思はず、

「金魚さん、金魚さん、私も寄せて下さい。」

と、言ひますと、金魚は誰かと思つて見ましたら、池の廻りに丁度ボート競争でも見て居る様に、蛙が澤山並んで居るのでした。直ぐに、

「さあ、お這入りなさい。」

と、言ひましたので、蛙は喜んで皆ドブン／＼と、水に飛び込みまして、夕方で種々のお遊びをして楽しく遊ばせて貰ひました。

それから蛙は少しも喧嘩をせぬ様になり、金魚さんのお家へも度々寄せて貰つて、大層仲よくなりました。

或日蛙が

「金魚さん。私の家へも遊びに来て下さいな。」

と、言ひますと、金魚は、

「私はあなたの様に足がありませんから、水の無い所へは行かれせん。」

と、申しましたので、蛙は圓い目をまん丸くして、

「まあ、さうですか。」

と、吃驚しました。それで皆の蛙が集つて、

「どうしたら金魚さんに遊びに来て貰へるだらう。」

かと、相談をしました。